

佐賀大学国際交流推進センター 平成27年度 年次報告書

Annual Reports of Center for Promotion of International Exchange
Saga University April 2015- March 2016



佐賀大学

ANNUAL REPORTS

目 次

I. 国際交流企画推進室	2
1. 国際戦略の在り方に関するワーキンググループ	2
2. 学術交流協定	4
3. 海外ネットワークの構築と情報発信	4
3.1 佐賀大学ホームカミングデー in インドネシア	
3.2 佐賀大学ホームカミングデー in バンコク	
3.3 佐賀大学プロモーション in バンコク	
4. 国際交流セミナーの開催	6
5. 佐賀大学友好特使の委嘱と活動	7
6. 佐賀大学ハノイ・サテライトの活動	8
7. 環黄海学長フォーラムへの参加	8
II. 学生交流部門	9
1. 留学生受け入れ	9
1.1 留学生受け入れ概況	
1.2 佐賀大学短期交換留学プログラム (SPACE-E および J)	
1.2.1 SPACE-E 実施報告	
1.2.2 SPACE-J 実施報告	
1.3 平成27年度日本語・日本文化研修コース	
1.4 平成27年度日本語研修コース	
1.5 Saga University Summer Program (SUSP) 2015	
1.6 香港中文大学学生交流プログラム (短期受け入れ)	
2. 学生の海外派遣	22
2.1 本学学生の海外派遣概況	
2.2 交換留学生の派遣	
2.3 トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラムによる海外派遣	
2.4 Saga University Study Abroad Program (SUSAP)	
2.5 学生の海外派遣支援 (国際化支援制度)	
3. キャンパスの国際化	41
III. 学術研究交流部門	43
1. 国際研究集会開催支援事業	43
2. 研究者海外派遣支援事業	45
IV. 地域国際連携室	47
1. 「平成27年度産学官国際交流セミナー」の開催	47
2. トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム「地域人材コース」	48
3. 佐賀県立武雄高校との交流	48
4. 地域国際交流行事等への協力	49
5. 佐賀県との連携	50

I. 国際交流企画推進室

1. 国際戦略の在り方に関するワーキンググループ

本学における「国際戦略」の在り方に関するワーキンググループを立ち上げ、本学の国際交流の現状分析と課題、全学的な取り組みの枠組みとなる方針とアクションについて協議を行った。平成27年12月から平成28年3月にかけて5回にわたり開催したワーキンググループでの検討を基に、3月29日開催の国際交流推進センター運営委員会で座長（大和武彦国際交流推進センター副センター長）から以下のとおり報告された。

〈検討事項〉

1. 第3期中期目標・中期計画における教育および研究のグローバル化のための方策
2. 「国際交流協定の在り方」に関する検証・改善
3. 「国際戦略構想等」に関する検証・改善
4. 国際交流推進センター室・部門組織の見直し
5. 留学生の安全保証問題の検討

1.1 第3期中期目標・中期計画における教育および研究のグローバル化のための方策

校友会による海外留学及び国際学会発表等の支援について協議された。校友会から提示された以下2つの基本方針に則って制度見直しを行う。

- (i) 海外留学の支援を強化する。
- (ii) 学生の国際学会発表の支援を廃止する。

1.2 「国際交流協定の在り方」に関する検証・改善

▼交流状況は平成25年度の調査結果によると、現在締結されている協定において、おおむね交流が継続されている。

▼大学間協定と部局間協定の区別を明確化した上で、協定締結を進めるための方針が必要。

〈大学間・部局間のメリットとデメリット〉

○大学間協定

メリット……当初交流のあった分野以外でも全学的・学際的な交流の拡大が期待できる。

複数の学部でそれぞれ協定を結び交流するより、複合的・多角的な交流の活性化が期待できる。

デメリット…交流分野を特定しないため、中心となる交流分野があいまいとなり、当初の交流も弱まる可能性がある。協定までの手続きが難しく時間がかかる。

○部局間協定

メリット……特定分野に絞った交流を行うので、深い「研究交流」が可能になる。

協定までの手続きが早い。

デメリット…特定分野以外や学際的な「研究交流」「学生交流」ができない。

	大学間	部局間
大学の規模	1. 総合大学 2. 単科大学、研究所で複数の学部と交流がある	1. 部局等 協定を結ぶ学部等と対応する学部等である
交流実績	1. 複数の学部等との研究者・学生・共同研究等の交流がある 2. 一学部等との交流しかないが、今後、全学的な拡大が期待される 3. まだ交流実績はないが、今後、全学的な交流促進の必要性がある	1. 一分野での研究者・学生の交流実績がある 2. まだ交流実績はないが、今後、部局として交流促進の必要性がある
期待事項	・全学的・学際的な交流の拡大 ・複数の学部等での、複合的な交流の活用化	・特定分野に絞った、深い研究交流の推進
注意事項	・担当教員の退職等による交流停止 ・交流分野を特定しないことによる、当初分野の交流の減退	・担当教員の退職等による交流停止
協定期間	・原則5年とし、特に申し出のない場合には自動更新とする	

検討の結果、以下が必要であることが認められた。

- ・交流協定締結基準の精査（交流実績、相手大学の規模・特色・研究レベル、期待される成果）
- ・重点交流を進める地域・国の選定
- ・重点交流大学の選定

1.3 「国際戦略構想等」に関する検証・改善

▼平成23年度に策定された「佐賀大学国際戦略構想」の見直し・更新が必要である。

- ・戦略構想の中の7つの戦略のうち、「十分な成果が得られていない」と評価された項目の強化又は廃止
- ・取り組みの選択と集中により、第3期に強化する取り組みを選定

▼第3期中期目標・中期計画と連動した骨太の方針の策定

- (i) 教育：留学生にとって魅力ある教育プログラムの構築
(英語による授業の拡充、インセンティブの導入)
- (ii) 研究：交流大学間でのキーパーソンの育成、研究分野を絞った協定校とのジョイントプログラム（派遣・受入）の更なる開発（部局・研究センターでの短期受入プログラムの実施）

1.4 国際交流推進センター室・部門組織の見直し

▼本センターは運営委員会の下部に4つの室・部門（国際交流企画推進室、学生交流部門、学術研究交流部門、地域国際連携室）が設置されている。各部門・室には専任教員の他、各学部から選出された委員が配置され、各部門・室で議論された事項が運営委員会で審議・決定となる。現状では会議数が多く業務が肥大化する一方、戦略的、効果的、スピーディーに課題を検討し、事業を実施することが困難であることが指摘された。室・部門を2つまたは3つに統合することが提案された。

1.5 留学生の安全保証問題の検討

安全保障輸出管理に係る外国人留学生取り扱いについては、大量破壊兵器の開発を行っている懸念のある国の学生を受け入れる際の対応について、文部科学省からも全国の大学に指導が強化されている情勢であるが、すでに規定等を整備した九州工業大学方式および長崎大学方式を参考にして検討する。九州工業大学は工学系単科大学であり、全学的に同大のシステムを導入することには懸念がある。長崎大学にならえば、まず大学としての留学生受入方針を議論したうえで、今後半年程度をかけて、他大学の動向もにらみつつシステムを構築すべきであり、拙速に結論を出すべきではないとの判断である。

2. 学術交流協定

平成28年3月末現在、本学は20カ国・地域の84大学と大学間交流協定を締結している（58～59頁参照）。地域別にみると、アジアが全体の8割以上を占めており、アジアを中心に大学及び地域の国際化を推進するという本学の方針を反映していると言える。

本学はこれまで学部・研究科による研究交流を基礎とした協定締結を主としてきたが、本センター設置以降、グローバル人材育成の観点から学生の海外派遣と留学生受入の重要性に鑑み、学生交流が大いに期待できる海外大学との大学間交流協定を戦略的に締結することを決めた。その結果、平成24年度にシドニー工科大学（オーストラリア）、25年度はヴィタウタス・マグヌス大学（リトアニア）、ユバスキュラ大学（フィンランド）と大学間交流協定を締結した。これら3大学との交流はH27年度末までに派遣13人、受入8人に上り軌道に乗っている。なお、平成27年度は新規の大学間交流協定締結はなかった。

3. 海外ネットワークの構築と情報発信

海外ネットワークの構築・強化・掘り起しのための一つの取り組みとして、今年度はインドネシア・ジョグジャカルタ及びタイ・バンコクにおいて「佐賀大学ホームカミングデー」を開催した。

3.1 佐賀大学ホームカミングデー in インドネシア

【日時】平成27年9月16日（水）

【会場】JOGJAKARTA HOTEL

【概要】

海外在住の卒業生や帰国留学生が一堂に会し、佐賀大学関係者のネットワーク構築につなげることを目的として開催した。ガジャマダ大学数理学部長、佐賀大学卒業生や佐賀大学で研究を行った者等38人が参加し、盛大に実施された。中島副学長の挨拶の後、工学系研究科STEPs学生による活動紹介、卒業生等のスピーチが行われ、最後にインドネシアから本学への最初の留学生である Susamoto Somowiyarjo 氏から挨拶があった。



中島副学長の挨拶



記念撮影

3.2 佐賀大学ホームカミングデー in バンコク

【日時】平成28年2月6日（土）

【会場】LE CONCORDE ホテル（バンコク市内）

【概要】

佐賀大学海外版ホームカミングデーは、海外在住の卒業生や留学生、佐賀県出身者、佐賀大学を支援する企業人等が一堂に会し、佐賀大学関係者のネットワークを強化することを目的として毎年開催している。今回は佐賀県山口知事のトップセールスと連動した、タイにおける佐賀大学の効果的なPRを企画し開催した。当日はタイにおける協定校であるタマサート大学、カセサート大学、キング・モンクット工科大学などから担当教員等が駆けつけてくれた。その他、元留学生や佐賀大学への留学を控えた現地学生、現在留学中の現役佐賀大学生、現地日本企業で活躍する佐賀大学卒業生にくわえ、佐賀県人会、在タイ日本国大使館、日本貿易振興機構（JETRO）バンコク事務所、日本学術振興会（JSPS）バンコク研究連絡センター、日本国際協力機構（JICA）タイ事務所などタイで活躍する関係者など、多方面から総勢約50人の参加を得た。

はじめに本学の滝澤理事・副学長より挨拶があり、続いて、在タイ日本国大使館の小林茂紀参事官、佐賀県人会の上野和浩会長、タイ王国元日本留学生協会副会長であるカセサート大学のマンコン・ロープラパコン国際教育センター長等から祝辞を頂戴した。小林参事官より、日タイ両国関係の強化のための大学間交流推進に向けた取り組みに対して、大きな期待と力強い応援のメッセージが述べられた。また、キング・モンクット工科大学のパンナマス・シリソムブーン准教授に対して、佐賀大学友好特使を新たに委嘱した。



ホームカミングデーの集合写真



ホームカミングデーで挨拶をする滝澤理事・副学長

3.3 佐賀大学プロモーション in バンコク

【日時】平成28年2月4日（木）

【会場】JW マリオットホテル（バンコク市内）

【概要】

佐賀県のPRレセプションにおいて、山口知事より、招待客100人余りに向けて佐賀県唯一の国立の総合大学として佐賀大学を紹介頂いた。本レセプション前後には、山口知事とともに、佐渡島在タイ特命全権大使を表敬し、佐賀大学の紹介と優秀なタイ人学生獲得に向けた意見交換を行った。その他、チュラロンコン大学やタマサート大学、キング・モンクット工科大学などの協定校をはじめ、泰日工業大学や国際交流基金バンコク日本文化センターなども訪問し、タイの関係機関との研究・教育面での連携強化と優秀なタイ人学生の更なる獲得に向けて佐賀大学のプロモーションを実施した。

また、その後本学国際交流推進センターの新美准教授が東北・北部タイのチェンマイ大学及びコンケン大学両協定校を表敬訪問し、更なる交流の促進に向けた意見交換を行った。



佐渡島特命全権大使、佐賀県山口知事と滝澤理事・副学長



滝澤理事・副学長らによるチュラロンコン大学副学長表敬



チェンマイ大学副学長から記念品を贈られる

4. 国際交流セミナーの開催

現在、佐賀大学は国際戦略構想において、「アジアを中心に地域社会と共に国際化を推進する」ことを掲げ、優秀な留学生の獲得、佐賀大学の特色を活かした魅力的な人材育成及び、地域社会への貢献に取り組んでいる。この事業は、佐賀大学は平成25年度より文部科学省の「地（知）の拠点整備事業（COC）」に採択され、来年度より「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」に引き継がれるなど地域貢献の点では進展が見られるが、一方で、留学生数の減少など大学・地域の国際化の点では多くの課題を抱えている。そこで今回は、地域との連携、外国人留学生受入による地域活性化、留学生を選択的に受入れ、地域産業へ輩出する地方国立大学の事例を紹介頂き、地方国立大学の国際化と地域企業・社会への貢献について改めて考える契機とした。

また、本セミナーはキャリアセンターとの共催とし、本学の元留学生から、日本での就職にあたっての経験をもとに、留学生の視点からどのようなサポートが必要かについて今後につながる有益な報告がなされた。

「優秀な留学生の獲得とグローバル人材育成のための戦略－地域企業・社会との連携」

【日時】平成28年1月22日（金） 14：10～17：30

【場所】佐賀大学学生会館 多目的ホール

【プログラム】

「留学生の受け入れと定着による地域活性化－国内外の取組み事例と課題」

佐藤 由利子 准教授

（東京工業大学 留学生センター／総合理工学研究科 環境理工学創造専攻）

「アジア・ブリッジ・プログラム－地方国立大学の国際化への取組」

土生 英里 教授（静岡大学 グローバル企画推進室 ABP 総括）

「留学生の就職活動について」

劉 諾忻（本学理工学部4年生）

全体討論



東京工業大学 佐藤准教授



静岡大学 土生教授

5. 佐賀大学友好特使の委嘱と活動

佐賀大学では帰国留学生等を佐賀大学の友好特使として委嘱している。この友好特使を通じて海外の教育・研究情報、現地ネットワークに関する情報の収集や発信を行い、留学生との交流および国際学術交流の推進を図っている。本年度は新たに1人に佐賀大学友好特使を委嘱した。タイのパンナマス准教授は、平成13年に佐賀大学大学院・鹿児島大学大学院連合農学研究科（博士課程）において学位を取得し、現在キング・モンクット工科大学の教員として活躍している。パンナマス准教授には、これまでに佐賀大学海外同窓会ネットワーク立ち上げのための現地実態調査や、現地同窓会の開催などにご尽力頂いている。

国名	名前	所属・職名	活動
タイ	パンナマス シリソムブーン	キング・モンクット工科大学 准教授	タイ人留学生ネットワーク キーパーソン

6. 佐賀大学ハノイ・サテライトの活動

平成21年9月にハノイ国家大学外国語大学内に設置した本学が有する海外唯一のサテライトオフィスは6年目を迎えた。これまで、多くの日本の大学や政府機関関係者が立ち寄り、情報交換の場として活用されていた。しかしながら、平成27年4月から文化教育学部が「教育学部」と「芸術地域デザイン学部」とに改組され、従来の文化教育学部のツィニング・プログラムを廃止することになった。今後、同サテライトオフィスの活用にあたっては、その主業務であったツィニング・プログラムの廃止によりその存続について検討する必要がある。佐賀大学では、各センターが独自に海外サテライトを設置し、海外研究活動等の拠点として活用している。実態を踏まえ、サテライトの配置等についても、効果的・効率的な運用を考えていきたい。



大和副センター長のハノイ外国語大学副学長表敬

7. 環黄海学長フォーラムへの参加

【日程】平成27年11月4日（水）

【会場】ロッテホテル釜山（韓国）

【概要】

日本・中国・韓国の大学関係者約80人が集まり、環黄海海域でのグローバル人材の育成及び大学館の今後の相互協力について協議した。午前の部は3カ国大学の代表によるプレゼンテーション、午後の部は質疑応答及び今後の本フォーラムの在り方について協議した。



発表を行う速水準教授



記念撮影

II. 学生交流部門

1. 留学生受け入れ

1.1 留学生受け入れ概況

平成23年から平成27年までの過去5年間の留学生数（学位取得を目的とする留学生、交換留学生、研究生）の推移を以下に示す。平成23年は前年の302人から、297人となった。直近の平成27年では209人であった。これを国籍別〔表1〕で見ると、中国人学生が最多で68人の減少、次いでインドネシア人学生の28人減少であった。中国人留学生については、日本全体の中国人学生数が平成23年頃から減少し始め、平成27年では1.5万人程度の減少となっている。本学も同様の傾向を示していると言える。インドネシア人留学生の減少の要因は平成25年度よりインドネシア政府（DIKTI）奨学金の受給対象大学から本学が外れたことにより、政府奨学金を受給して留学することができなくなったことが大きく影響していると推測される。本学では、インドネシアの各協定校と連携し、佐賀大学を再度対象とするようインドネシア政府に働きかけている。中国・インドネシア以外の国からの留学生は概ね横ばいとなっているが、他方で、ミャンマーやインド、またモザンビークやケニアなどのアフリカ諸国からの留学生を新規に受け入れており、留学生の国籍・地域多様化が進んでいる。

次に学生の在籍身分別推移を見ると〔表2〕、学位取得をめざした正規留学生・研究生が減少分の多くを占めている。他方、特別聴講学生（交換）・短プロSPACE（交換）の協定校からの交換留学生数は50人前後で推移している。更に学部・大学院別では、学部所属の留学生は100人程度で推移している一方、大学院所属の留学生は200人から100人に半減している。

以上より、本学の留学生が減少している要因は、国籍・地域別では中国・インドネシアからの留学生の減少であり、在籍身分では協定校からの交換留学生以外の学位取得を目指した学生、なかでも大学院に所属する留学生の減少であることがわかる。このことから、一つには相手国政府奨学金の獲得を本学からも積極的に支援するとともに、各学部・研究科が実施する特色ある留学生受入プログラムや、海外の大学等と連携して実施する共同研究を推進し、本学大学院への進学を促す必要がある。そのためには、協定校等への直接訪問による佐賀大学のプロモーション活動と、本学で学位を取得し帰国した元留学生等との交流強化及びネットワークの活用、ホームページやSNS等による不特定多数に向けた広報を行うことが重要である。

【表1】平成23年～27年 国籍別留学生数の推移
(毎年5月1日)

		H23年	H24年	H25年	H26年	H27年
アジア	中国	161	145	136	109	93
	インドネシア	33	28	22	17	5
	マレーシア	13	20	24	21	20
	韓国	21	19	16	16	9
	バングラデシュ	15	13	11	7	18
	ベトナム	14	18	14	13	17
	台湾	11	9	8	14	11
	タイ	5	6	11	10	12
	スリランカ	10	9	7	8	5
	ネパール	7	5	2	2	2
	カンボジア	0	1	1	4	1

アジア	ミャンマー	0	0	0	0	1
	モンゴル	1	1	1	1	0
	パキスタン	1	0	0	0	1
	ラオス	1	1	0	1	0
	インド	0	0	0	0	1
中近東	イラン	1	1	1	1	0
アフリカ	エジプト	0	0	1	1	2
	ウガンダ	1	1	1	0	0
	モザンビーク	0	0	0	0	1
	ケニア	0	0	0	0	1
北米	アメリカ	1	0	2	2	1
オセアニア	オーストラリア	0	0	0	1	3
ヨーロッパ	フランス	0	1	2	2	1
	フィンランド	0	0	0	0	2
	ポーランド	1	1	0	0	1
	リトアニア	0	0	1	0	1
	アルメニア	0	0	0	1	0
	スウェーデン	0	0	0	1	0
	ベルギー	0	0	0	1	0
計		297	279	261	233	209

【表 2】平成23年～27年 在籍身分別留学生数の推移 (毎年5月1日)

	H23年	H24年	H25年	H26年	H27年
正規生 (学位取得)	200	195	187	160	144
研究生	22	13	7	4	8
特別研究学生 (交換)	1	2	3	2	3
特別聴講学生 (交換)	31	30	25	0	0
短プロ SPACE (交換)	18	16	24	57	48
科目等履修生	3	0	0	0	0
連合大学院	22	22	14	7	4
日本語・日本文化研修留学生	0	1	1	3	2
計	297	279	261	233	209

平成25年10月より日本語で専門科目を履修する交換留学生のための短期留学プログラム (SPACE-J) が開始となり、平成26年度特別聴講学生 (交換) に分類されていた留学生は短期留学プログラムに加えられている。

1.2 佐賀大学短期交換留学プログラム (SPACE-E および J)

1.2.1 SPACE-E 実施報告

■コーディネーター

古賀 弘毅 准教授 (全学教育機構) 丹羽 順子 准教授 (全学教育機構)

1. 平成27年度春学期 (平成27年4月～9月)

■実施概要

平成26年10月に入学した第14期の学生12人が、2学期目も続けて科目を学修した。また、4月入学の学生9人を受け入れた。これら計21人の学生を出身国別に見ると、中国1人、台湾5人、タイ1人、インドネシア22人、フランス1人、アメリカ11人、オーストラリア3人、フィンランド2人、ポーランド1人、リトアニア1人、バングラデシュ1人、スリランカ2人である。受け入れ学部別に見ると、文化教育学部13人、経済学部1人、理工学部3人、農学部4人となっている。学生は全員、必修科目である「日本事情研修B」、選択必修の「日本語」や「異文化交流インターフェイス科目」、および各学部が提供している「専門選択科目 (英語による講義)」を履修した。これらの他に、理工学部と農学部に所属する学生は、「自主研究」を履修し、自身の研究課題を設定して受け入れ教員から個別に指導を受けた。

平成27年度春学期時間割

	月	火	水	木	金
I	総合Ⅰ (全) 総合Ⅱ (全) 総合Ⅲ (全)	総合Ⅰ (全) 総合Ⅱ (全) 総合Ⅲ (全) 聴解Ⅳ (全) 聴解Ⅴ (全)	総合Ⅰ (全) 総合Ⅱ (全) 総合Ⅲ (全)	総合Ⅰ (全) 総合Ⅱ (全) 総合Ⅲ (全)	総合Ⅰ (全) 総合Ⅱ (全) 総合Ⅲ (全) 作文Ⅵ (A) (全)
II	ペプチド化学 (農)	総合Ⅰ (全) 総合Ⅱ (全) 作文Ⅲ (全)	異文化交流Ⅲ (全)	異文化交流Ⅱ (全)	English Thesis Writing (全)
III		理工学紹介B (理)			Developing WEB Pages on Japan (文)
IV			日本事情研修B (全)	言語習得に関する教育研究方法論 (文)	
V			概説 農学と環境学 (農)		

(全)：全学教育機構 (農)：農学部 (理)：理工学部 (文)：文化教育学部

「日本語」は、能力別クラスになっており、レベル1 (日本語総合Ⅰ) からレベル6 (上級) までであるが、日本語総合Ⅰから総合Ⅲまでを掲載

春学期の視察・見学等

H27年	4月	日本事情研修 (福岡市民防災センター、九州国立博物館、太宰府天満宮)
	5月	日本文化研修 (茶道研修)
	6月	日本事情研修 (工場見学：キューピー、キリンビール)

春学期入学者（5ヵ国・地域 6大学 9人）

	国・地域	性別	奨学金区分	大学名	在学期間
1	オーストラリア	男	私費	ラトロープ大学	1年
2		男	JASSO		1年
3		女	私費	シドニー工科大学	1年
4	中国	女	私費		半年
5	インドネシア	女	佐賀大学奨励費	マラン国立大学	半年
6		女	佐賀大学奨励費	リアウイスラム大学	1年
7	スリランカ	女	佐賀大学奨励費	ペラデニア大学	1年
8		女	佐賀大学奨励費		1年
9	ポーランド	女	佐賀大学奨励費	ルブリン工科大学	半年

自主研究の履修状況

学部内訳	H27年4月～8月	H27年10月～H28年3月
理工学部	3人	1人
農学部	4人	4人

自主研究テーマ（平成27年4月～8月）

理工学部	生体信号を用いた移動ロボットの制御に関する研究
	ネットワークロボットのレーザー光位置推定技術の研究
	モバイル学習システムのための適応的インターフェイス制御
農学部	日本の山村に居住する高齢者の生活と健康
	農業情報の活用に関する研究
	大腸菌における Cas9 スクレアーゼの発現と精製
	大豆突然変異体の根粒形成に関する基礎研究

履修学生の専門分野

理工学部：Electrical and Electronic Engineering, Mechatronics, Electrical Engineering

農学部：Soil Resources and Environment Management, Agribusiness Management, Molecular Biology and Biotechnology, Advanced Crop Production Technology

2. 平成27年度秋学期（平成27年10月～平成28年3月）

■実施概要

平成27年10月に新たに第14期の学生10人が入学した。4月に入学した学生9人のうち3人は8月に帰国したが、残った6人と合わせて16人が秋学期の科目を学修した。出身国別の人数は、台湾4人、韓国1人、フランス2人、アメリカ1人、インドネシア1人、バングラデシュ1人、ベトナム1人、オーストラリア3人、スリランカ2人である。受け入れ学部別に見ると、文化教育学部8人、経済学部2人、理工学部1人、農学部5人となっている。学生は全員、必修科目である「日本事情研修A」及び各学部が提供している「専門選択科目（英語による講義）」、さらに必要に応じて「日本語」あるいは「異文化交流」インターフェイス科目を履修した。これらの他に、理工学部と農学部に所属する学生、および他学部の学生のうち希望する学生は、「自主研究」を履修し、自身の研究課題を設定して受け入れ教員から個別に指導を受けた。

平成27年度秋学期時間割

	月	火	水	木	金
I	総合Ⅰ（全） 総合Ⅱ（全） 総合Ⅲ（全）	総合Ⅰ（全） 総合Ⅱ（全） 総合Ⅲ（全）	総合Ⅰ（全） 総合Ⅱ（全） 総合Ⅲ（全）	総合Ⅰ（全） 総合Ⅱ（全） 総合Ⅲ（全）	総合Ⅰ（全） 総合Ⅱ（全） 総合Ⅲ（全）
II	開発経済学持論（経）	総合Ⅰ（全） 総合Ⅱ（全）	異文化交流Ⅲ（全） アカデミックライティング（全）	異文化交流Ⅳ（全） 我が国の環境保全の最新情報（文）	漢字Ⅰ（全） 漢字Ⅱ（全） 漢字Ⅲ（全） 理工学紹介A（理）
III	日本に関するWEBページ 製作入門（文） 文法Ⅱ（全）		文法（全） 読解Ⅱ（全） 作文Ⅲ（全） アカデミックライティング（経）	会話Ⅰ（全） 会話Ⅱ（全） 会話Ⅲ（全） 我が国の環境保全の最新情報（文）	読解Ⅰ（全） 概説・応用生物学（農）
IV		日本・東南アジア関係論（文）	日本事情研修A（全）	作文Ⅱ（全）	

（全）：全学教育機構 （経）：経済学 （農）：農学部 （理）：理工学部 （文）：文化教育学部

秋学期の視察・見学等

H27年 11月	日本事情研修（熊本城、水前寺公園）
11月	日本事情研修（唐津市七山、国際交流、一泊二日）
H28年 1月	日本事情研修（羊羹資料館、酒造見学）

SPACE-E 秋学期入学者（6ヵ国・地域 8大学 10人）

	国・地域	性別	奨学金区分	大学名	在籍期間
1	台湾	女	JASSO	国立中興大学	1年
2		女	私費		半年
3		女	私費		半年
4		男	JASSO	元培医事科技大学	1年
5	フランス	女	JASSO	オルレアン大学	1年
6		女	私費	ブルゴーニュ大学	1年
7	アメリカ	女	JASSO	スリッパリーロック大学	1年
8	韓国	男	JASSO	国民大学校	1年
9	ベトナム	男	私費	ベトナム国家大学ハノイ外国語大学	半年
10	バングラデシュ	男	JASSO	チッタゴン工科大学	1年

自主研究テーマ（平成27年10月～平成28年3月）

理工学部	マイクロ波信号処理の実現に向けたマイクロ波機能回路の研究
農学部	発酵食品の機能性について
	アグリツーリズムと日本における地域開発
	組み換え型 Cas9 スクレアーゼのゲノム編集への活用
	大豆の共生窒素固定変異体の表現型解析

履修学生の専門分野

理工学部：Electronic Engineering

農学部：Agribusiness Management, Molecular Biology and Biotechnology, Advanced Crop Production Technology, Food Science, Agribusiness

平成27年度インターフェイスプログラム「異文化交流」科目の履修

SPACE-E の学生は、全学教育機構「異文化交流」プログラムが提供する以下の6つの科目を履修し、それぞれの科目で日本人学生と留学生と一緒に学んだ。

春学期

異文化交流Ⅱ	Outdoor Education in English
異文化交流Ⅲ	Culture in Dance

秋学期

異文化交流Ⅱ	異文化衝突の作法
異文化交流Ⅱ	Ancient and Modern Traditions of Health in the World
異文化交流Ⅲ	SPACE-E との交流
異文化交流Ⅳ	地域社会の価値再検討：フィールドワーク



春学期 修了式



地域の方々との交流

1.2.2 SPACE-J 実施報告

■コース概要

SPACE-Jは佐賀大学の協定校に所属する学生を対象としたプログラムである。日本語能力試験（JLPT）N2相当以上の日本語能力を有することが参加の条件である。日本語や日本社会について学べるほか、個々の学生の専攻に応じた授業を日本語で履修できるカリキュラムを提供している。SPACE-Jには、レギュラーコースとブリッジコースの2種類が設けられている。来日当初のプレースメントテストの結果、日本語能力が初中級・中級レベルと判定された学生は、ブリッジコースに参加し、日本語を優先的に学修する。1学期終了後に十分な日本語能力を獲得していれば、レギュラーコースに移ることができる。それぞれのコースの履修科目は下記のとおりである。学生は、必修科目である「日本事情研修C/D」を含め、1学期あたり最低12単位を修得することが求められる。条件を満たした学生には、修了時に佐賀大学から修了証が授与される。

■コーディネーター

布尾 勝一郎 准教授（全学教育機構） 中山 亜紀子 准教授（全学教育機構）

SPACE-Jの履修科目

SPACE-J	レギュラーコース		日本事情研修	必修2単位	1学期あたり12単位以上
			専門科目等	選択	
			日本語科目	選択	
	ブリッジコース	中級	日本事情研修	必修2単位	
			日本語科目	6単位以上	
			専門科目等	最大4単位	
		初中級	日本事情研修	必修2単位	
			日本語科目	10単位以上	

1. 平成27年度春学期（平成27年4月～9月）

■実施概要

平成27年度のSPACE-Jプログラムの参加者数は27人（うち、ブリッジコース7人）であった。ブリッジコース参加者のうち1人は、1学期目の終了後に試験を経てレギュラーコースへの移行を認められ、各自の専門分野も履修できることとなった。残る6人は、ブリッジコースで半年の留学期間を終了、あるいは1年間、日本語を中心として学修し、一部専門分野の授業も履修した。SPACE-Jの学生全員が履修する「日本事情研修」では、学期ごとにテーマを設けて、体験型の学習を行った。また、授業の一環として、学外見学などの行事を実施した。春学期、秋学期それぞれの入学者および日本事情研修の詳細は以下のとおりである。

平成27年度春学期の視察・見学等

H27年 6月	日本事情研修（佐賀県立武雄高校訪問、御船山楽園（武雄市））
---------	-------------------------------

春学期入学者（3ヵ国・地域 9大学 16人）

	国・地域	性別	奨学金区分	大学名	在籍期間
1	中国	女	私費	浙江理工大学	1年
2		女	私費		1年
3		女	私費		半年
4		女	JASSO	北京工業大学	1年
5		女	JASSO		1年
6		女	私費		1年
7		女	JASSO	西南政法大学	1年
8		女	私費		1年
9		女	JASSO	浙江大学城市学院	1年
10	韓国	男	私費	国民大学校	1年
11		男	私費	済州大学校	半年
12		女	私費	培材大学校	1年
13	台湾	女	JASSO	輔仁カトリック大学	1年
14		女	私費	文藻外語大学	半年
15		女	私費		半年
16		女	私費		半年

■日本事情研修

春学期の日本事情研修Dは、「スポーツ」をテーマとして、柔道体験、日本人へのインタビューなどを通じて、日本におけるスポーツと、自国におけるスポーツの位置づけについて理解を深めた。その他、学外研修として、佐賀県立武雄高校を訪問し、部活動の見学やインタビューなど高校生との交流を行った。

2. 平成27年度秋学期（平成27年10月～平成28年3月）

平成27年度秋学期の視察・見学等

H27年 11月	日本事情研修（九州陶磁器文化館、窯元見学・絵付け体験、有田ポーセリンパーク、有田町）
----------	--

秋学期入学者（4ヵ国・地域 7大学 11人）

	国・地域	性別	奨学金区分	大学名	在籍期間
1	中国	女	私費	遼寧師範大学	1年
2		女	私費		1年
3		女	JASSO	浙江理工大学	1年
4		女	JASSO		1年
5		女	JASSO	ハルビン工業大学	1年
6		女	私費		1年
7		男	私費	浙江大学城市学院	1年
8	韓国	女	JASSO	釜慶大学校	1年
9	台湾	女	JASSO	国立政治大学	1年
10	ベトナム	女	JASSO	ベトナム国家大学ハノイ外国語大学	1年
11	カンボジア	男	JASSO	王立プノンベン大学	1年

■日本事情研修

秋学期の日本事情研修Cでは、「文化の往還」をテーマとして、「現代の文化」がどのような経路を通じて伝播したのか、それがどのように変化して世界に広がり、または逆輸入されたのかを、グループで調査し、発表を行った。日本発祥の文化の例として、ゲストスピーカーを招いて折り紙の歴史と現代的な発展について講義を受けた。大阪大学の教員による遠隔授業で、絵画や「ことば」をめぐって、日本と海外の文化接触が行われた事例について学んだ。また、学外研修としては、日本の磁器発祥の地である有田を訪問し、佐賀県立九州陶磁文化館を学芸員の解説を交えて見学したほか、窯元で工房を見学、絵付け体験も行うなど、佐賀及びその文化についての知識を深めた。

■奨学金

平成27年度は、JASSO 奨学金の申請が追加採択され、平成28年1月から12人に対して支給が可能となった。審査の結果、春学期入学者5人、秋学期入学者7人に支給した。

1.3 平成27年度日本語・日本文化研修コース

■コース概要

本学の日本語・日本文化研修コースは、研修生が自らの日本語能力を伸ばすだけでなく、日本人学生と共修することによって、広く日本文化や地域のことを学べるコースとなっている。具体的には、全学教育機構が提供する「外国人留学生プログラムのための日本語科目」や日本人学生との共修科目である「インターフェース異文化交流」、また自分の興味に応じた授業を、佐賀大学の各学部提供科目のなかから選んで履修することができる。これは平成25年度の改革によるもので、これにより、幅広い専門をもった学生が、自分の興味関心に応じた科目を履修することができるようになった。

下記の単位を修得すると、修了時に佐賀大学から修了証が授与される。

区 分		授業科目名	単位数	修了要件
教養教育科目	外国人留学生プログラムのための授業科目			選択必修 6単位以上修得すること
	インターフェース科目			選択必修 2単位以上修得すること
学部間共通 教育科目	留学生プログラム 教育科目	日本事情研修A	2	選択必修
		日本事情研修C	2	2単位以上修得すること
		日本事情研修B	2	選択必修
		日本事情研修D	2	2単位以上修得すること
全学教育機構が開設する授業科目				選択必修
各学部が開設する授業科目				6単位以上修得すること
計				18単位以上

■コーディネーター

中山 亜紀子 准教授（全学教育機構）

布尾 勝一郎 准教授（全学教育機構）

■開講期間

平成26年10月～平成27年8月

平成27年10月～平成28年8月

■実施概要

平成27年度は、26年度後期から在籍していたティラク大学（インド）、ハノイ外国語大学（ベトナム）、各1人ずつ、合計2人の研修生が佐賀大学で学んだ。2人とも、自分の留学目的や興味に応じた授業を履修し、インターフェース科目にも積極的に参加し、無事に修了した。さらに、ティラク大学からの学生は、日本人の敬語使用意識について日研生レポートを作成した。彼らの前途が洋々としていることを望みたい。

平成27年度後期からは、初めて大学推薦の学生を受け入れ、大使館推薦の学生と合わせて、サンパウロ大学（ブラジル）、ベオグラード大学（セルビア）、王立プノンペン大学（カンボジア）、アザディ世界言語大学（トルクメニスタン）の計4人の研修生が本学で学ぶこととなった。受け入れ学部は、文化教育学部と経済学部である。現在は、日本語の能力を伸ばしつつ、日本人学生との共修授業に参加したり、クラブ活動に参加したりするなど、積極的に活動し、日本社会への理解を深めている。また、SPACE-Jの日本事情研修を履修し、研修旅行等にも参加している。来年度前期には、それぞれの目的を達成してくれるものと考えている。

平成26年度日本語・日本文化研修コース受講生（平成26年10月～平成27年8月）

国名	性別	受入学部	大学名	推薦枠
ベトナム	女	文化教育学部	ベトナム国家大学外国語大学	大使館
インド	女	文化教育学部	ティラク大学	大使館

平成27年度日本語・日本文化研修コース受講生（平成27年10月～平成28年8月）

国名	性別	受入学部	大学名	推薦枠
ブラジル	女	文化教育学部	サンパウロ総合大学	大使館
セルビア	女	文化教育学部	ベオグラード大学	大使館
カンボジア	男	文化教育学部	王立プノンペン大学	大学
トルクメニスタン	男	経済学部	アザディ世界言語大学	大使館



平成26年度受講生修了式



平成27年度入学式

1.4 平成27年度日本語研修コース

■コース概要

外国人留学生の大学院入学前予備教育として、日本語研修コースを開設した。主に国費外国人留学生のためのコースであるが、私費留学生についても参加を認めている。日本語初級前半・初級後半・初中級までの3レベルを設定し、参加学生はプレースメント・テストによってどのレベルに該当するか判断される。各レベル、一週間に9～10コマの日本語授業が開講され、研修コース参加者は原則当該レベルの全ての日本語授業を受講し、全ての授業科目を修了すればコース修了となる。平成27年度前学期は3人が、後学期は5人が本コースに参加した。研究生の問題として、大学院入試が近づくとつれ日本語授業を欠席しがちになるが、最後までやり通すように強く指導する必要がある。

■コーディネーター

吉川 達 講師（全学教育機構）

■日本語研修コース参加学生

平成27年度春学期（平成27年4月～平成27年8月） 平成27年度秋学期（平成27年10月～平成28年2月）

国名	所属研究科	区分	レベル
ベトナム	工学系研究科	国費	初級前半レベル
中国	教育学研究科	私費	初級後半レベル
中国	経済学研究科	私費	初級後半レベル

国名	所属研究科	区分	レベル
スリランカ	経済学研究科	国費	初級前半レベル
モロッコ	工学系研究科	ABE イニシアティブ	初級前半レベル
エジプト	工学系研究科	ABE イニシアティブ	初級前半レベル
モザンビーク	工学系研究科	ABE イニシアティブ	初級前半レベル
韓国	工学系研究科	私費	初級後半レベル

1.5 Saga University Summer Program (SUSP) 2015

■概要と成果

今年で3回目の実施となった本プログラムには、タイ、カンボジア、インドネシア、中国、アメリカ、リトアニアの9つの協定校より21人の留学生が参加した。また21人の佐賀大学生が留学生の言語・生活サポート等のお世話をを行うバディとしてプログラムに参加し、留学生との親睦を深め、地球規模での連帯と協力が不可欠な持続可能な社会の構築をテーマに講義や活動に取り組んだ。最終日のプレゼンテーションではプログラムを通して得た知識や経験をふまえ、出身国・地域の現状との比較をしながら、持続可能な社会を実現するための提言をグループで発表した。15日間と短期ではあったが、参加学生は佐賀大学の特色ある研究や教育に触れ、地域の企業や自治体の先進的な取り組みを学び、関連する知識を獲得しただけでなく、持続可能な社会の構築に対する意識を高めることができた。プログラムを通して、海外協定校とのさらなる交流の促進と本学学生の国際性の醸成につながることを期待される。

■コーディネーター

大和 武彦 教授（国際交流推進センター副センター長）

山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■学内協力教員

池上教授（海洋エネルギー研究副センター長）、田中教授（農学部）、サーリヤ・ディ・シルバ教授（経済学部）、北垣教授（農学部）、渡教授（工学系研究科）、郭教授（シンクロトン光応用研究センター長）、辻准教授（農学部）、李准教授（工学系研究科）、ウォンタナス・ストーン・ナルモン准教授（工学系研究科）、松本講師（アグリ創生教育研究センター）、三島講師（工学系研究科）、浅岡講師（全学教育機構）

■学外協力機関・協力者

おおき循環センター、さが水ものがたり館、佐賀市神野浄水場、佐賀市下水浄化センター、佐賀県九州陶磁文化館、道の駅鹿島

■実施期間

平成27年6月30日～7月14日（19日間）

■参加人数

協定校所属学生21人（全員に佐賀大学より奨学金支給）、佐賀大学生21人

■参加学生の所属大学

地域	国名	大学名	参加人数
北米	アメリカ	スリッパリーロック大学	2
ヨーロッパ	リトアニア	ヴァイタウタス・マグナス大学	1
アジア	タイ	コンケン大学	4
		カセサート大学	2
		タマサート大学	1
	中国	中国農業大学	4
	インドネシア	ガジャマダ大学	4
	カンボジア	王立プノンペン大学	2
		王立プノンペン法経大学	1



開講式



祐徳稲荷神社参拝

■スケジュール

		6月29日（月）	6月30日（火）	7月1日（水）	7月2日（木）	7月3日（金）	7月4日（土）	7月5日（日）
エネルギー・環境・食物 WE E K I	午前	学生到着	10：00－ 開講式・オリエンテーション	10：00－12：00 Energy Planning of City and Region in Japan	9：00－13：20 大木町資源循環センター	10：15－15：00 佐賀大学 海洋エネルギー 研究センター	自由	自由
			11：30－13：00 キャンパスツアー&ランチ	12：00 佐賀大学・交換留学生 交流会				
	13：00－14：30 Development Economics and Development/ A Global Perspective		13：00－14：30 ホームステイのための サバイバル日本語	14：40－16：10 Japanese Foods and the Culture of Fermented Foods				
	14：40－16：10 Differences and Commonalities Among Developing Countries							
午後	19：00－21：00 ウェルカム BBQ パーティ							

農業・芸術・コミュニケーション WEEK II	午前	7月6日(月)	7月7日(火)	7月8日(水)	7月9日(木)	7月10日(金)	7月11日(土)	7月12日(日)
		自由	9:00-12:00 佐賀大学農学部附属 アグリ創生教育 研究センター	10:30-12:00 さが水ものがたり館	9:30-12:30 鹿島干潟 干潟の生物と環境 ミニガタリンピック	8:50-10:20 Introduction to "Old-" and "Fine-" Ceramics	10:30-12:00 有田ポーセリンパーク	ホームステイ
	10:30-12:00 留学生による研究室紹介 化学工業と地球環境	自由	13:30-17:00 佐賀市神野浄水場 佐賀市下水浄化センター	13:00-15:00 祐徳稲荷神社 昼食・神社見学	10:30-12:00			
	13:00-14:30 シンクロトン光応用 研究センターの紹介				13:00-14:30 見学・絵付け体験	15:00-16:00 有田陶磁文化館		
午後	7月6日(月)	7月7日(火)	7月8日(水)	7月9日(木)	7月10日(金)	7月11日(土)	7月12日(日)	
	15:40-17:00 佐賀大学 シンクロトン 光応用研究センター	自由	13:30-17:00 佐賀市神野浄水場 佐賀市下水浄化センター	13:00-15:00 祐徳稲荷神社 昼食・神社見学	13:00-14:30 見学・絵付け体験	15:00-16:00 有田陶磁文化館	ホームステイ	ホームステイ

WEEK III レビュー	午前	7月13日(月)	7月14日(火)	7月15日(水)
		10:00-12:00 振り返り	10:40-学生報告 11:40-12:10修了式	帰国
	13:00-16:10 プレゼンテーション準備	12:15-13:15 フェアウェルパーティー	学生解散	

1.6 香港中文大学学生交流プログラム (短期受け入れ)

■概要と成果

7月5日から14日まで香港中文大学の学生10人を受け入れ、サマープログラムを実施した。昨年度からの大きな変更点は、武雄高校との交流活動を新たに加えたことと、三瀬の合宿にこれまでSUSPと合同で行っていたものを単独で行ったことである。武雄高校は英語授業の一環で交流を行うため、中文大の学生も日本語は使わず英語のみで意思疎通を行った。まず、自己紹介と七夕にちなんだ短冊作りが行われ、その後コミュニケーション英語Ⅱというクラスに参加し、香港の紹介、グループに分かれてのゲームや武雄市の紹介などが行われた。三瀬の活動については中文大生に佐大生を加えた20人という人数は交流活動・グループ活動において非常にいい人数であったように感じた。活動時はあいにくの雨で計画通りには進まなかったが楽しみながら行っていたようである。3月の香港への派遣と今回の受け入れで一応の本年度の学生交流は終了したが、参加した佐大生・中文大生ともに最後の別れの涙が示すように互いに強い関係を築いたことは間違いない。今後も学生間の交流は続くであろうし、中文大生に刺激を受けた佐大生が海外に視野を向けることも期待される。

■コーディネーター

吉川 達 講師 (全学教育機構)

■実施期間

平成27年7月5日(日)～14日(火)10日間

■参加人数

香港中文大学生10人、佐賀大学生10人

■スケジュール

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	7月5日(日)	7月6日(月)	7月7日(火)	7月8日(水)	7月9日(木)	7月10日(金)	7月11日(土)	7月12日(日)	7月13日(月)	7月14日(火)
午前	来日	開講式 キャンパスツアー	日本語授業参加 10:30-12:00 日本語発表VI ディベート	8:50-10:20 日本語学授業参加 10:30-12:00 インターフェイス 異文化理解授業 参加	SUSP 合同 ミニガタリンピック・ 鹿島見学 9:30 道の駅鹿島着 9:30-10:00 干潟展望館・ ミニ水族館見学	SUSP 合同 有田陶磁器	三瀬活動 10:30 出発 11:30 昼食 13:00 三瀬到着 4地区に分かれ 作業&交流 17:00 活動終了 やまびこの湯 18:00 懇親会 @中鶴地区公民館 ほたる鑑賞	三瀬活動 起床 朝食 掃除 活動 11:00 帰路	自主課題発表準備 13:00-14:30 自主課題調査発表 14:40-15:30 修了式	帰国
午後			14:00-16:00 県庁見学・ 佐賀市散策	武雄高校交流 14:10- 顔合せ・ アイスプレキング 15:25-16:15 授業見学(コミュニ ケーション英語II) 16:30-17:30 武雄市内案内	唐津見学 曳山展示場 唐津城			10:30-12:30 ミニガタリンピック 13:00-15:00 祐徳稲荷神社 昼食・散策		



開校式にて

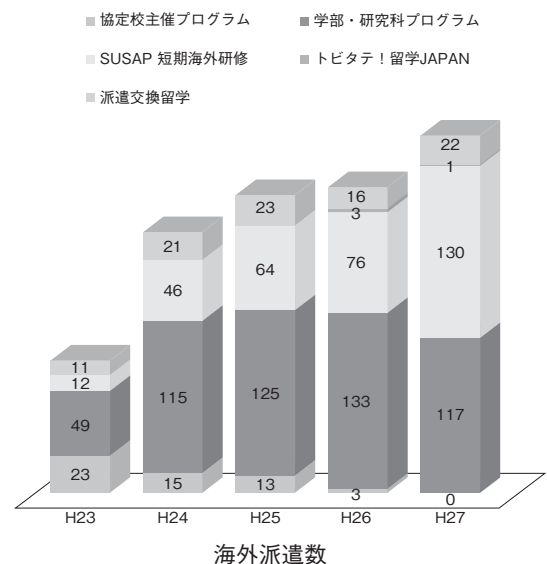


九州陶磁文化館を視察

2. 学生の海外派遣

2.1 本学学生の海外派遣概況

国際交流推進センターが設置された平成23年度から今年度までの派遣実績の推移は以下のグラフに示すとおりである。本センター設置から4年間で派遣学生数が95人から270人へと約3倍に拡大した。派遣数の伸びは本センターが実施する短期派遣プログラム(Saga University Study Abroad Program, SUSAP)への参加者数の増加に起因する。参加者数の増加は短期プログラムの多様化と拡充、経済的支援の強化によるところが大きい。参加学生のプログラム満足度・評価が高く、学生の間でプログラムについての認知度を高めることにつながっていると考えられる。一方、3ヶ月以上の長期留学(交換留学およびトビタテ留学JAPAN日本代表プログラム)による派遣は、昨年度比では4人増であるが、5年間の推移ではそれほど伸びていない。この背景には、長期留学が



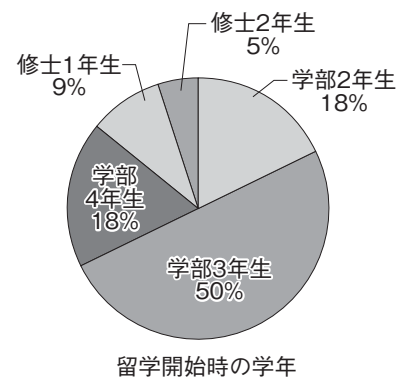
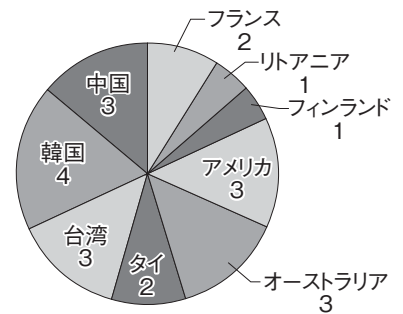
教育実習や公務員試験等を含む就職活動に支障を来すのではないかと不安や、経済的な負担が大きいという懸念が根強いことがあると思われる。

2.2 交換留学生の派遣

今年度は9ヵ国・地域の15の海外協定校に22人の学生を派遣した。前年度の16人から6人増加した。留学先の傾向を地域別にみると、半数以上が東アジア・東南アジアへ留学している。またフランスやフィンランド、リトアニアおよびアジア諸国の非英語圏への留学は全体の7割以上を占めている。非英語圏への留学が増加している背景には、台湾、リトアニア、フィンランド、タイなどの大学では、多様な授業を現地学生や留学生と共に英語で履修できることがある。本学学生にとっては選択肢が増えたことで、留学先の多様化が進んでいる。もう一つの近年の傾向として、留学開始学年の早期化が指摘できる。国際交流推進センター設置当時は、派遣学生のほとんどが学部4年時に留学を行い、交換留学をすると卒業までに5年ないしは6年かかってしまうという状況であった。

一方、今年度の派遣学生の場合、4年時に留学を開始した学生は2割弱(4人)であった。就職活動の開始時期までに帰国することを念頭において、学部1年または2年時に学内申請していると考えられる。留学のための支援の充実に加え、入学直後から留学情報の効果的な発信と提供を行うことで、4年間のラーニングプランの中に組み込むことを早期に検討し、語学力向上を含む留学準備をすることを促す必要がある。

また今年度は、これまでに無かった交換留学制度を活用した大学院生の研究留学も見られた。工学系研究科2人、経済学研究科1人は修士論文の一部となる研究活動を協定校の研究室や研究センターで行った。



■平成27年度に本学から派遣された交換学生（9カ国・地域 15大学 22人）

派遣国	派遣先大学	氏名	所属	派遣時 学年	派遣期間	奨学金
アメリカ	スリッパリーロック大学	古賀 大規	文化教育学部	4	平成27年8月～ 平成28年5月	佐賀大学奨励費
		十時亜矢佳	文化教育学部	3	平成27年8月～ 平成28年5月	佐賀大学奨励費
	パシフィック大学	古川友里絵	文化教育学部	2	平成28年1月～ 平成28年12月	佐賀大学奨励費
フランス	ブルゴーニュ大学	古賀 淳美	文化教育学部	3	平成27年9月～ 平成28年6月	業務スーパードリーム奨学金
	オルレアン大学	茶園 彩	文化教育学部	2	平成27年8月～ 平成28年5月	佐賀大学奨励費
フィンランド	ユバスキュラ大学	平松 千紘	経済学部	3	平成28年1月～ 平成28年12月	佐賀大学奨励費
リトアニア	ヴィタウタス・マグヌス大学	西田可奈子	文化教育学部	3	平成27年8月～ 平成28年7月	校友会・後援会
オーストラリア	シドニー工科大学	土橋翔一郎	経済学部	3	平成27年7月～ 平成28年6月	校友会
	ラトロープ大学	田中 愛美	経済学部	4	平成27年7月～ 平成27年11月	校友会
	シドニー工科大学	内田潤一郎	文化教育学部	4	平成28年3月～ 平成28年12月	後援会・校友会
中国	北京工業大学	高岡 遼	文化教育学部	3	平成28年2月～ 平成29年1月	JASSO
		山下 雄大	理工学部	3	平成28年2月～ 平成29年1月	JASSO
		小松 彩織	文化教育学部	2	平成28年2月～ 平成29年1月	校友会
韓国	国民大学校	田中 咲弥	文化教育学部	3	平成27年9月～ 平成27年12月	JASSO
		安武 智子	文化教育学部	3	平成27年9月～ 平成28年6月	JASSO
		服部 菜緒	文化教育学部	2	平成28年3月～ 平成28年12月	佐賀大学奨励費
		河原幸有美	理工学部	3	平成28年3月～ 平成28年12月	校友会
台湾	国立政治大学校	張本 欣子	経済学研究科	2	平成27年8月～ 平成28年1月	JASSO
	国立中興大学	一柳 弥志	工学系研究科	1	平成27年8月～ 平成27年11月	工学系研究科 学生海外短期派遣事業
	国立政治大学	杉山 樹保	文化教育学部	3	平成28年2月～ 平成29年1月	JASSO
タイ	タマサート大学	上葉 葵	文化教育学部	4	平成27年8月～ 平成28年5月	JASSO
		日高祐太郎	工学系研究科	1	平成27年8月～ 平成27年12月	工学系研究科 学生海外短期派遣事業

佐賀大学奨励費：佐賀大学学生海外派遣奨励金（1年間30万円、1月期間15万円（一時金））

校友会：佐賀大学校友会学生派遣奨励金（1年間10万円、1学期間5万円（一時金））

後援会：学生援助金支援制度（佐賀大学後援会）（10万円（一時金））

JASSO：JASSO 海外留学支援制度（韓国7万円、台湾6万円、中国6万円、タイ7万円（月額））

業務スーパードリーム奨学金（民間）（15万円（月額））

経済的支援については、JASSOの海外留学支援制度の採択、本学校友会・後援会奨励金等の支給、民間奨学金応募への支援により、前年度に続き奨学金受給率が100%となった。今年度も「アジアで活躍できるリーダー養成プログラム」がJASSO海外留学支援制度に採択され、アジアの協定校に派遣される学生7人への支援が可能となった。各奨学金採択状況、奨学金内容は上に示すとおりである。

国際交流推進センターでは、留学にかかわる学生の不安や疑問を解消するために、留学フェアや説明会の実施に加え、SNSやブログなど多様な媒体を活用した留学情報の提供、留学経験者とのネットワーキング、担当教員によるアドバイジング等を継続実施してきた。今年度は新たに学生メンターによる支援の試行を4月27日から2ヵ月間行った。これは1年間の留学を終え帰国した複数の学生が、留学を検討または準備している学生のメンターとなって情報提供やアドバイジングを行なうピアサポート活動である。教員によるアドバイジングと異なり、基本情報や具体的なプランがなくても気軽に相談ができる。試行期間中の利用者数、相談内容、メンター活動の時間設定等のデータを参照し、平成28年度に改善点を明らかにした上で本格的な実施をしたい。

2.3 トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラムによる海外派遣

「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」は平成26年度に開始した官民協働で取り組む海外留学支援制度で、希望学生は大学を通じて申請を行う。海外協定校が提供する教育プログラムに参加する交換留学とは異なり、留学先は大学に限定されない。申請時に現地での学習や実践活動を自ら計画しなければならず、独創的な留学計画を立てられる一方で、アイデアを計画書の形にする作業に苦勞する学生が多い。自主性や積極性だけでなく、インターパーソナルコミュニケーションや問題解決能力などが留学前から求められている。本支援制度には昨年度の第一期に3人の本学学生の計画が採択され、インド・ケニア、インドネシア、ミャンマーへの留学を実現させた。本年度は4件の応募のうち1件が採択された。

氏名	学部・研究科	専攻	学年	派遣先国	活動内容	派遣枠
蒲原 昇平	文化教育学部	学校教育課程	3	カンボジア	現地小学校での日本語指導	多様性人材コース

2.4 Saga University Study Abroad Program (SUSAP)

SUSAPは海外協定校等での講義、現地学生・他国からの留学生との共同活動や意見交換、一般市民との交流等を通して、現地の社会や文化、生活習慣を学び、多様な文化や価値観を理解するとともに、国際的な視野を育むことを目指して本センターが協力・連携し実施するプログラムである。今年度はプログラムの多様化と拡充をさらにすすめ、6ヵ国・地域の11大学（昨年度は4ヵ国・地域、7大学8プログラム）へ学生を派遣した。またSUSAPプログラムに加え、今年度は日本政府が推進する「対日理解促進交流プログラム」のカケハシ・プロジェクトに採択され、学生23人を米国に派遣した。本プロジェクトによる派遣も含めると、短期プログラムに全体で130人を派遣したことになる。

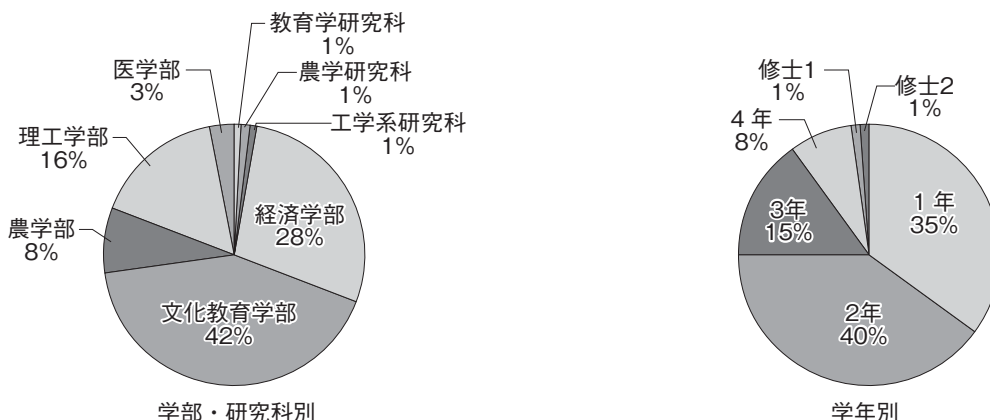
以下の表に示す通り、SUSAPは異文化接触や海外渡航経験の少ない学部1～2年生を対象とした異文化への導入プログラム、語学研修を主としたプログラム、英語で専門科目を履修する高度なものまで、学生個々の学習

進度、語学力、関心や目的、キャリアプラン等にあわせて選択できるようにしている。今年度は3つのプログラムに参加する学生については、事前に履修登録を行い、十分な成果が見られた学生に対して基本教養科目の「国際交流実習」2単位が付与された。SUSAPは現地での生活にスムーズに適応し異国での体験学習を通して豊かな学びが得られるよう、出発前の4回の事前研修に参加することが義務付けられている。

平成27年度実施のSUSAPプログラム

海外・異文化への導入		語学研修が主となるもの		英語を使って学ぶ・活動するもの	
韓国語・文化	大邱大学校プログラム(韓国)	韓国語	培材大学校プログラム(韓国)	英語で専門	中興大学プログラム(台湾)
韓国語と韓国社会・文化を学ぶ		韓国語のインセンティブコース		国際貿易とビジネスマネジメントを学ぶ&中華文化体験	
【対象】	学部生・大学院生(学部1、2年生優先)	【対象】	学部生・大学院生	【対象】	学部生・大学院生(専攻は不問)
【派遣時期・期間】	夏16日間	【派遣時期・期間】	春24日間	【派遣時期・期間】	夏12日間
【語学力】	不問	【語学力】	不問	【語学力】	英語によるコミュニケーションができること
【単位】	国際交流実習(基本教養科目)2単位	【単位】	なし	【単位】	なし
文化・学生交流	台北大学プログラム(台湾)	中国語	浙江理工大学プログラム(中国)	課題解決	BRIDGE TO THE FUTURE PROGRAM(シンガポール)
台湾文化・社会を学ぶ		中国語の集中コース、日系企業の動向、上海佐賀県人会との交流		シンガポールの多民族社会の経験を学び、地域の将来を考える	
【対象】	学部生・大学院生	【対象】	学部生・大学院生	【対象】	学部生・大学院生
【派遣時期・期間】	夏11日間	【派遣時期・期間】	春1ヶ月	【派遣時期・期間】	夏15日間
【語学力】	不問	【語学力】	不問	【語学力】	TOEIC550点以上
【単位】	なし	【単位】	なし	【単位】	なし
学生交流	香港中文大学学生交流プログラム(中国)	英語・社会・文化	カーティン大学プログラム(シンガポール)	ビジネス	LEAF Business English Program(カナダ)
現地学生との交流・香港社会理解・日系企業動向セミナー		シンガポールで多様な文化に触れながら英語を磨く		北米のビジネス文化とビジネス英語を学ぶ	
【対象】	学部生・大学院生(学部1、2年生を優先)	【対象】	学部生・大学院生	【対象】	学部生・大学院生(専攻は問いません)
【派遣時期・期間】	春10日間	【派遣時期・期間】	春1ヶ月	【派遣時期・期間】	夏16日間
【語学力】	不問	【語学力】	不問	【語学力】	TOEIC600点以上
【単位】	国際交流実習(基本教養科目)2単位	【単位】	国際交流実習(基本教養科目)2単位	【単位】	なし
英語・学生交流	シドニー工科大学プログラム(オーストラリア)	英語で専門	華東大学プログラム(台湾)	様々な分野の授業を英語で受講・本格的な留学経験が得られる	
英語研修と現地学生バディとの交流		様々な分野の授業を英語で受講・本格的な留学経験が得られる			
【対象】	学部生・大学院生	【対象】	学部生・大学院生(修士課程・博士課程いずれも可)	【対象】	
【派遣時期・期間】	春5週間	【派遣時期・期間】	春37日間	【派遣時期・期間】	
【語学力】	不問	【語学力】	英語によるコミュニケーションができること	【語学力】	
【単位】	なし	【単位】	なし	【単位】	

H27年度の参加学生130人の傾向を以下に述べる。男女比では女子学生が全体の8割弱を占めており、女子学生の海外留学に対する積極的な姿勢が見られる。学年別では学部1年生が35% (45人)、学部2年生が40% (52人) となっており、学部1~2年生の参加が全体の75%を占めている。時間に余裕がある1~2年生時に、春や夏の長期休暇を活用して留学に参加しているようことがわかる。今年度も全学部から学生が参加した。経済学部と文化教育学部からの参加が7割を占めている。



2.4.1 大邱大学校プログラム（韓国）

■実施期間 平成27年 8月7日～22日（16日間）

■概要

大邱大学校への学生派遣は今年で3回目となった。大邱大学校の海外協定校に所属する学生を主な対象に開催されるサマープログラムで、韓国語の授業と韓国文化体験、近郊へのスタディートリップが提供される。今年度は培材大学校（韓国）への派遣も予定していたが、韓国の一部の地域で6月から感染症（MERS）が流行しはじめたため、培材大学校プログラムがキャンセルとなった。これにより培材大学校プログラムに参加を予定していた学生4人も大邱大学校プログラムに参加することとなり、合計で14人の学生が本学から派遣された。例年と同様の傾向であるが、今年も男子学生の参加はなかった。学生はプレースメントテストの結果によりレベル分けされた韓国語クラスに32時間参加した。語学授業以外に韓国の伝統文化やスポーツ、大邱近郊の小旅行などに参加した。例年、本プログラムの参加者が交換留学を実現させており、長期留学への動機付けともなっている。本プログラムは、今年から基本教養科目2単位が付与されることになった。

■担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■単位付与 国際交流実習（基本教養科目）2単位

■奨学金 大邱大学校による授業料免除10人、佐賀大学による助成4人

■参加学生 14人

氏名	学部・研究科	学年
寺田しおり	文化教育学部	3
永野 佐和	文化教育学部	3
吉田 緑夏	文化教育学部	3
古賀寸美麗	文化教育学部	2
北原 茉莉	文化教育学部	2
石山真梨子	文化教育学部	2
松本 恵佳	文化教育学部	2
戸次佳菜子	経済学部	2
山中 百華	理工学部	2
脇山 裕子	文化教育学部	1
伊澤 菜帆	文化教育学部	1
鶴 涼菜	経済学部	1
古賀 愛絵	経済学部	1
市川 楓子	理工学部	1



韓服体験

2.4.2 台北大学プログラム（台湾）

■実施期間 平成27年8月10日～21日（12日間）

■概要

本プログラムは台湾の協定校の一つである国立台北大学が毎年実施するサマープログラムである。14人の応募者の中から10人が選抜された。参加者の構成は学部1年生から3年生の女子1人、男子9人で、人文社会系の学生以外に農学部および医学部からの参加もあった。本プログラムの研修は、基礎中国語の学習と台湾の文化体験、様々な名所旧跡への視察訪問が組み込まれ、短い期間の中で多くの活動が提供された。特に、多文化グループでの視察活動の機会が多く、本学学生は現地学生や海外からの学生とあらかじめ訪問先を検討し自分たちで電車やバスを使って様々な場所を訪れた。講義形式の授業に慣れている本学学生にとっては、本プログラムに戸惑う学生もいた。しかし、英語を使って海外の学生と折衝し、訪問先や活動内容を自らプランニングする活動を通じて、積極的に自らの意見を述べることの重要性を学ぶことができた。

■担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■単位付与 なし

■奨学金 台北大学による授業料免除、宿泊費・食費の助成

■参加学生 10人

氏名	学部・研究科	学年
高岡 遼	文化教育学部	3
馬場 絢子	医学部	3
千田こころ	文化教育学部	2
吉田 知加	文化教育学部	2
村岡 麻衣	文化教育学部	2
岩永 麻希	文化教育学部	2
千住 咲貴	経済学部	2
江崎 美帆	経済学部	2
稲富 加那	経済学部	1
服部 南	農学部	1



真剣に聴講する佐賀大学生

2.4.3 中興大学プログラム（台湾）

■実施期間 平成27年8月7日～19日（13日間）

■概要

本プログラムは台湾の協定校の一つである国立中興大学が協定校の学生を対象として毎年実施しているものである。本学からの派遣学生は応募者9人の中から6人が選抜された。本プログラムは言語や文化を学ぶことを目的としたものではなく、テーマ設定された英語による講義を受講し、専門的な知識を獲得することを目指している。テーマは毎年異なるが、今年は「国際貿易・マーケティング」「西欧諸国におけるビジネスマネジメント」「西欧人のユーモア」「台湾茶芸」がテーマとして設定されており、学生は希望するものを複数選んで参加した。多くの学生にとって英語で授業を受けることはもちろんのこと、英語で質問やディスカッションをする経験ははじめてであったため、大変苦勞したようであった。また教員と学生との双方向型の授業やグループディスカッションなど主体的な授業への参加が求められ、日本の授業スタイルとの違いに戸惑いながらも、学ぶことの面白さを実感したという学生が多かった。このような経験は自分自身の関心、能力、資質などを客観的にとらえ、相対化

する機会となったと考える。

- 担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）
- 単位付与 なし
- 奨学金 中興大学による授業料免除及び本学による寮費等の助成
- 参加学生 6人

氏名	学部・研究科	学年
木戸優香里	経済学部	3
井手美乃里	文化教育学部	2
山田 優美	文化教育学部	2
上鶴 知那	経済学部	2
江里口 瑛	経済学部	2
堀江 拓水	経済学部	1



台湾茶芸を学ぶ学生たち

2.4.4 Bridge to the Future Program（シンガポール）

- 実施期間 平成27年9月5日～20日（16日間）

■概要

シンガポールのネアンポリテクニクと教育内容やアプローチなどを共同で検討・開発したプログラムで、今年度で2回目の実施である。本学学生のみを対象としている。本プログラムの目的は、シンガポールの多民族社会のあり方を理解することで、日本における多文化社会の課題について学生に考えさせ、将来、地域の多文化共生社会を支える人材に成長させることである。参加学生は、シンガポールの歴史、文化、移民政策などを講義や視察、現地学生との交流を通して学んだ。今年は9人の学生が参加した。9人中4人が理工学部、2人が農学部と、理系の学生が半数以上を占めた。昨年度はパイロットプログラムとして実施した。その際、質の高い教育を提供してもらったものの、本学学生の英語能力、特に聞く・話すというオーラルコミュニケーション能力の不足から、講義の内容を十分に理解することができず、質問やディスカッションも困難であることがわかった。2年目を迎えた今年は、これらの問題点を改善するため、現地で英語の運用能力を高めつつ、シンガポールの多民族社会について学ぶというアプローチに切り替えた。帰国後の学生によるアンケートでは参加学生全てが自らの成果を高く評価しており、改善が反映されていた。また本プログラムではインド系、マレー系、中華系とそれぞれの学生グループと交流する機会が多く提供された。現地学生の積極性や高いコミュニケーション能力に圧倒されたようである。帰国後の学生生活に大いにプラスの影響を与えたものとする。

- 担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）
- 単位付与 なし
- 奨学金 JASSO 海外留学支援制度（1人あたり奨学金10万円）を受給
- 参加学生 9人

氏名	学部・研究科	学年
柿本 理沙	農学部	4
綾部 咲紀	文化教育学部	2
手島 透子	経済学部	2
富安 実穂	理工学部	2
岩本 結衣	理工学部	2
松井さつき	理工学部	2
佐藤 靖	理工学部	1
岡澤 隆佑	経済学部	1
古川 拓実	農学部	1



グループディスカッション中

2.4.5 LEAFプログラム (カナダ)

■実施期間 平成27年8月7日～24日 (18日間)

■概要

今年度初めてカナダの協定校ウィルフリッドロリエ大学のLEAF Business English Programに学生を派遣した。本プログラムはビジネス英語の学習に加え、北米のビジネス文化について様々な国籍の学生とのディスカッションやグループワーク、プレゼンテーションを通して学ぶものである。高い語学能力を備えていることが求められることから、TOEIC600点を基準として募集を行ったところ、6人の学生が応募し派遣が決まった。本プログラムは1ヶ月のプログラムとして実施されており、本学学生は学期末試験の後、プログラム途中で合流した。すでに研修の半分が終わっており前半の学習内容を各自が自学で補わなければならなかった。また本学学生にとって経験の少ないアクティブラーニングの授業が行われるため、積極性が強く求められた。帰国後の振り返り事後研修では、毎日夜遅くまで勉強したことや、他の国の学生と意見をまとめ上げる作業が大変であったという苦労話が多かったが、プログラムを修了し、大きな自信を得た様子がうかがえた。本プログラムの醍醐味は、ウィルフリッドロリエ大学が世界各地の学生を本プログラムに集めていること、そして学生の文化的・言語的バックグラウンドや語学力を精査し、クラス内のダイバーシティを保っている点である。多文化環境下でメンバーと意見を活発にかわし、協力してプロジェクトを遂行する経験は大変有意義であり、2週間の短い研修ではあるもののグローバル化した社会で活躍するために必要な能力や資質を養う機会となったと考える。

■担当教員 山田 直子 准教授 (国際交流推進センター)

■単位付与 なし

■奨学金 本学による授業料と登録費の助成

■参加学生 6人

氏名	学部・研究科	学年
岡部 有紗	文化教育学部	4
牧山 優花	文化教育学部	3
澄川 円香	農学部	3
島塚 康平	農学部	3
坂口さくら	文化教育学部	2
淵脇 菜子	理工学部	2



修了式にて記念撮影

2.4.6 香港中文大学プログラム（中国）

■実施期間 平成27年2月21日～3月1日（10日間）

■概要

本プログラムは、本年度で4年目となる。例年通り香港での現地研修の前に4回事前研修を行った。事前研修では、香港の基礎情報の確認、自主課題の設定、スカイプによる香港中文大生との事前交流、危機管理講習などを行った。医学部を除く全学部から参加者があり、佐賀大生同士も学部を超える交流となった。香港での現地研修では、主に香港中文大生との交流、佐賀大生同士での授業参加、自主課題調査、博物館等の見学、現地で活躍する日本人との意見交換などを行った。現地では10人の佐賀大生参加者が10人の香港中文大生とパートナーとなり、活動を行う。自主課題調査は、このパートナーの助けを借りながら調査を進め、最終日に香港中文大学の授業で成果を発表する。発表時の使用言語は日本語で構わないが、本年度の学生の中には英語での発表に挑戦する者もいた。プレゼンテーションの質は過去の参加者に比べて全体的に高かったように感じた。香港中文大生との交流はパートナー10人が中心であるが、それ以外にも過去のプログラム参加者や、授業見学时に交流した学生など多くの香港中文大生と交流する機会があった。本年度は週末に1泊2日の合宿があり、パートナーの香港中文大生と寝食を共にした。平時は香港中文大生の授業が忙しくパートナーとはいえ、なかなか親密な関係は築けなかったが、合宿によって互いの関係が一気に強くなったようであった。また、高校訪問時には現地の高校生とも英語と日本語を交えて交流した。現地での日本人との交流について、これまでは現地で働く、佐賀をはじめとする九州出身の日本人とキャリアデザインや海外での生活などについての意見交換会を行っていたが、今年度はJETRO 香港を訪問し、所長と次長から香港における日本企業の状況や海外で働くことの意義等について講義をいただいた。同時に同会場にて、香港日本人倶楽部の会長兼商工会議所長から、香港で生活する日本人の状況、海外での生活についてお話しいただいた。佐賀大生は1、2年生が多かったためまだまだ将来の進路について明確に決めていない学生が多かったが、具体的な話を聞けたことで、今後のキャリアデザインの参考となったようであった。さらに別の日には、佐賀大学友好特使である副島氏と共に、日本人墓地へ訪れ簡単な清掃作業と佐賀出身者の墓参りを行った。現地研修は休みもなく充実した10日間であった。

■担当教員 吉川 達 講師（全学教育機構）

■単位付与 国際交流実習（基本教養科目）2単位

■奨学金 6人がJASSO 海外留学支援制度（1人あたり奨学金7万円）を受給、4人は本学より5万円の奨学金を受給

■参加学生 10人

氏名	学部	学年
松島 美咲	文化教育学部	3
白坂 龍哉	文化教育学部	2
橋本 美咲	経済学部	2
伊藤 仁視	経済学部	2
北島 遥	理工学部	2
坂口 聖奈	経済学部	1
佐光 孝平	経済学部	1
田口 渚	文化教育学部	1
酒井 咲季	文化教育学部	1
松本めぐみ	農学部	1



日本人墓地訪問

2.4.7 培材大学校プログラム（韓国）

■実施期間 平成28年3月2日～25日（24日間）

■概要

韓国の協定校の一つである培材大学校への派遣は今年度が初めてである。11人の女子学生が参加した。11人中7人は、先に実施した夏のSUSAP大邱大学校プログラムに参加しており、前回の短期留学が動機付けとなっている。本プログラムは培材大学校が交換留学を対象として開講している韓国語コースに学期始めの24日間のみ参加するものである。韓国に長期間留学をしている学生とともに集中して韓国語を学習できる環境に身を置けるため、語学力の向上を目指す学生にとっては非常に魅力的であった。また韓国の新学期開始時期のため、キャンパスは活気に溢れ、現地学生や他国出身学生との交流機会も豊富にあった。以上のことから、学生の満足度は非常に高かった。学生の振り返りエッセイでは、中国人、モンゴル人、ブルガリア人など様々な国の学生とともに韓国語を学んだ経験が特に有意義であったと評価している学生が多い。海外の学生の積極的な姿勢を目の当たりにすることで、自らを客観的に捉え、どのような自分になりたいのかを再考する機会になった。

■担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■単位付与 なし

■奨学金 培材大学校が授業料を免除し、本学からは5万円の奨学金を支給

■参加学生 11人

氏名	学部・研究科	学年
北原 茉莉	文化教育学部	2
川崎 真依	文化教育学部	2
戸次佳菜子	経済学部	2
森永なぎさ	経済学部	2
山中 百華	理工学部	2
伊香賀 彩	文化教育学部	1
脇山 裕子	文化教育学部	1
宮崎ほなみ	文化教育学部	1
古賀 愛絵	経済学部	1
鶴 涼菜	経済学部	1
市川 楓子	理工学部	1



インターナショナルラウンジの説明を受ける学生たち

2.4.8 浙江理工大学プログラム（中国）

■実施期間 平成28年3月2日～4月2日（1ヶ月間）

■概要

中国の協定校の一つである浙江理工大学への派遣は今年で2度目となった。理工学部を除くすべての学部から学部1～2年生が参加した。浙江理工大学の交換留学生や正規入学を目指す学生のために学期を通して実施している通常の中国語コースに学期始めの1ヶ月間参加した。2週間程度のサマープログラムと異なり、文化体験や視察などの機会は提供されないが、語学力向上を目指す学生にとっては集中的に中国語学習に取り組むことができる。また中国人教員が中国語のみを使用して展開する授業に多様な国の学生と参加できる点も魅力的である。また本学で学位を取得し（工学系研究科）、現在、浙江理工大学の教員として活躍している陸先生との交流会を行い、佐賀や杭州の文化社会についてざっくばらんに意見交換をする機会を持った。さらに本プログラムでは中

国で活躍されている本学友好特使の江頭利将氏にも尽力いただき、中国に於ける日系企業の経済活動についての講義や上海佐賀県人会の方々との懇親会などの貴重な機会を提供していただいた。参加学生が成果として挙げているものとして顕著な点が、第一に、1ヶ月間の研修で中国語能力が向上したこと、第二にそれまで抱いていた中国に対する表層的な捉え方やイメージを変えることができた点である。本プログラムでの経験を通して、異文化理解のためには、目の前の情報を鵜呑みにしないこと、また関心を持って自ら積極的に働きかけを行うことの重要性を学んだことがうかがえる。

■担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■単位付与 なし

■奨学金 浙江理工大学による授業料免除及び本学より5万円の奨学金を受給

■参加学生 9人

氏名	学部・研究科	学年
吉田 知加	文化教育学部	2
田中 夕貴	文化教育学部	2
江崎 美帆	経済学部	2
山口 拓馬	経済学部	2
宮本 康平	経済学部	2
白坂 苑子	農学部	2
伊藤ひかり	文化教育学部	1
乗田 侑毅	医学部	1
西瀬戸美沙	医学部	1



世界遺産西湖にて

2.4.9 カーティン大学プログラム（シンガポール）

■実施期間 平成28年2月20日～3月19日（1ヶ月間）

■概要

シンガポールのカーティン大学への派遣は今回で3回目となった。今回はこれまでの中で最も多い15人を派遣した。過去の参加学生が本プログラムを高く評価し、学内での認知度が高まってきていることが考えられる。15人中12人が女子学生で、他のプログラム同様、女子学生の参加が多数を占めている。本学から派遣された学生は、カーティン大学内に附設された英語学校において、アジアの様々な国の出身学生とともに「聞く・話す」を重点的にトレーニングする英語コースに参加した。こちらでは、1日4時間の授業の後、午後3時まで教員が常駐する教室で宿題や予習・復習などを行う自主学習の時間を設定しており、時間数の面でも教育指導の面でも非常に手厚いところが特徴である。提供された授業や活動はもちろんのこと、シンガポールでの生活そのものが有意義な「学び」となったことがエッセイから読みとれる。佐賀を飛び出し、多様な民族文化が入り交じる空間で日常生活を送ることで、自らの「常識」を超えた事象を五感で学び取ることができた。その中で適応能力の向上、異文化への理解力、問題解決能力などを高めることができたと考える。帰国後もこれらの新しい能力や資質を継続して伸ばして欲しい。

■担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■単位付与 国際交流実習（基本教養科目）2単位

■奨学金 本学より10万円の奨学金を受給

■参加学生 15人

氏名	学部・研究科	学年
香月亜紀子	文化教育学部	4
中野 晃	理工学部	2
古賀 文也	理工学部	2
坂田 桃子	文化教育学部	1
川床 真子	文化教育学部	1
秀島 芽依	文化教育学部	1
大久保 凜	文化教育学部	1
道辻 真衣	文化教育学部	1
濱本ほの佳	文化教育学部	1
赤嶺真里奈	経済学部	1
村上 晶	経済学部	1
猿渡 梓	経済学部	1
小早川弓佳	経済学部	1
鈴木穂乃花	経済学部	1
町田幸太郎	理工学部	1



先生・クラスメイトと

2. 4. 10 シドニー工科大学プログラム（オーストラリア）

■実施期間 平成28年2月16日～3月19日（1ヶ月間）

■概要

オーストラリアの協定校、シドニー工科大学（UTS）の UTS Insearch が提供する英語のコースに学部1年～4年の10人を派遣した。UTSへは毎年佐賀大学から1人～3人の交換留学生を派遣しており、また本学への交換留学生やサマープログラムの受け入れも多く、最も学生交流が活発な協定校の一つである。UTSにはアジア研究を副専攻とする学生が多く、日本語学習や日本留学が大変人気である。このような交流実績とUTSの特色を活かすため、本学学生と日本留学を控えた現地学生との活発な交流を促すバディプログラムをUTSの日本語教育担当教員の協力を得て実施した。現地学生のバディを募り、本学学生とマッチングをした。本学学生の人数を上回る多くのUTS学生が参加を希望した。始めに交流会を行い、バディ同士のつながりや自分の交流相手以外の学生とのネットワークを作ることを促した。

英語研修はGeneral English Courseに参加し、英語によるオーラルコミュニケーション能力の向上を目指した。UTS Insearchには日本人学生が少ないことから、クラスの中で日本人がマジョリティを占めることはなく、バランスのとれたクラス編成であった。他国出身者の学生と机を並べて学習することで刺激を受け、英語学習のみならず積極的・主体的に行動することの大切さを学生らは実感していた。本プログラムの一部として、アデレード大学大学院に留学中の本学農学部の卒業生によるレクチャーを企画した。卒業生自身も学部3年生の春休みにSUSAPでニュージーランドの研修に参加しており、これを契機に海外の大学院進学を検討することになった。1年前まで同じ佐賀大学生であった卒業生から、より大きな夢を実現させた体験談を直接聞くことで、帰国後の学習や学生生活に対するモチベーションを高めた。

■担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■単位付与 なし

■奨学金 本学より10万円の奨学金を受給

■参加学生 10人

氏名	学部・研究科	学年
志岐 聡美	経済学部	4
辻 茉友子	経済学部	2
劉 彦君	経済学部	2
福田 優衣	理工学部	2
内田 翔	理工学部	2
松田 浩輝	農学部	2
手嶋 恭子	農学部	2
加藤 春佳	文化教育学部	1
富吉あすか	文化教育学部	1
田中 宏明	理工学部	1



現地学生（パディ）

2.4.11 東華大学プログラム（台湾）

■実施期間 平成28年2月19日～3月27日（1ヶ月間）

■概要

今年度初めて台湾の協定校である国立東華大学に学生を派遣した。約1ヶ月間、英語による授業を履修するもので、参加学生自身の専攻分野や関心のある専門外の授業に参加ができる。経済学部の学生が物理学の授業を履修することが可能であったり、1人の学生が複数学部の授業を同時に履修することも可能であった。学生らは、物理学、心理学、環境学、経営学など様々な分野の専門科目を履修した。これらの英語による授業は、留学生のための授業ではなく、大半の履修者は現地学生であり、時には現地で学位を取る留学生や交換留学生の参加もある。本学学生は、台湾人学生が留学生とともに英語で授業を受け、ディスカッションやプレゼンテーションを問題なく行なっていることに強い衝撃を受けたようである。このように台湾の大学では、近年多くの授業が英語で行われるようになり、台湾留学は中国語の習得や中国語による専門的な教育を受けるだけに限定されなくなった。

本プログラムの目的は英語を習得することではなく、英語で専門を学ぶことであるため、自分の英語力にある程度自信のある学生が応募してきたようである。本プログラムは今年初めての実施であり、英語で専門を学ぶというハードルの高いプログラムであったにもかかわらず、7人の応募があり全員が派遣された。7人中2人は交換留学への準備という目的で参加していた。通常、交換留学は1学期間又は1年間の参加が前提であるが、東華大学は本学との学生交流を促進するために、大変柔軟に対応して下さった。

■担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■単位付与 なし

■奨学金 東華大学より授業料免除及び本学より5万円の奨学金を受給

■参加学生 7人

氏名	学部・研究科	学年
田村 駿太	文化教育学部	2
上鶴 知那	経済学部	2
好川 杏華	経済学部	2
三好 貴也	文化教育学部	1
範 東洋彦	経済学部	1
山崎 星華	経済学部	1
佐藤 靖	理工学部	1



現地学生との交流

2. 4. 11 対日理解促進交流プログラムーカケハシ・プロジェクト（アメリカ）

■実施機関 平成27年11月17日～24日（8日間）

■概要

「カケハシ・プロジェクト」は日本政府が推進する「対日理解促進交流プログラム」の一環として実施されるもので、本学はアメリカに派遣される第一陣として選ばれた。学内の全学部から選抜された23人がニューヨーク州を訪問し、創業400年を迎える有田焼をはじめとする佐賀のものづくりを発信する活動を行った。ニューヨーク州立大学ラガーディア・コミュニティカレッジでの現地学生との交流、日本国総領事館や国連本部の訪問、米国奴隷制度に関する視察や9.11メモリアルの見学等を通して、異なる文化、宗教、信条をもつ人々とのコミュニケーションのあり方、相互理解の重要性について学んだ。

現地の大学では、有田焼と佐賀のものづくりについて発表と実演を行ない、美しい佐賀の景色、有田焼の歴史や製作工程、陶工のインタビュー等を紹介した。時代を経ても変わらない価値（技術・精神）を持つ有田焼と、時代とともに柔軟に変化する有田焼の二面性を最大の魅力として紹介した。有田焼の下絵付けと展示、日本茶と佐賀の菓子、日本酒、佐賀錦、書道の6つのブースを設置し、現地の学生に佐賀のものづくりを楽しんで理解してもらった。参加学生らはアメリカでの様々な人々との交流を通して、人種や文化が違えども、偏見を持たずにオープンな心で相手を理解しようと努力すること、その上で自分のことを理解してもらうよう努めることこそが重要であると学んだ。

■担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■単位付与 なし

■奨学金 日本政府より日本国内の移動を除く参加費全額を免除

■参加学生 23人

氏名	学部・研究科	学年	氏名	学部・研究科	学年
吉田 有里	教育学研究科	M2	水上真裕子	文化教育学部	3
内藤 沙耶	工学系研究科	M1	木村 陽	経済学部	3
川俣 千寛	農学研究科	M1	宮本 香帆	経済学部	3
中村 有沙	文化教育学部	4	橋口 正宏	理工学部	3
中村 萌々	文化教育学部	4	猪口 洋平	理工学部	3
山本 智之	文化教育学部	4	松瀬 淳	農学部	3
吉田 大貴	理工学部	4	和田 奈緒	文化教育学部	2
黒岩 春乃	理工学部	4	陶山 香奈	文化教育学部	2
大田 潤	農学部	4	松田有紀子	経済学部	2
北村 美樹	文化教育学部	3	垣内 晴帆	文化教育学部	1
水野 沙耶	文化教育学部	3	森 健史郎	医学部	1
黒木 由美	文化教育学部	3			



有田焼下絵付け



書道パフォーマンス

2. 5 学生の海外派遣支援（国際化支援制度）

本学では学生の海外派遣を促進するために、3つの支援事業を行なっている。一つは1年または1学期間の交換留学をする優れた学生に対する経済的支援、二つ目に本センターが実施する短期海外研修（SUSAP）に参加する学生への支援、最後に各学部・研究科が実施する海外研修プログラムへの支援（参加学生への奨学金支給）である。本年度、これら3つの事業により支援を受け、留学をした学生は全体で167人であった。

2.5.1 平成27年度佐賀大学海外研修プログラム参加助成

(1) 平成27年度佐賀大学短期海外研修プログラム参加助成

番号	派遣先	支援人数 (参加学生数)	期間	プログラム名	助成額
1	韓国 大邱 大邱大学校	14	平成27年8月7日～ 8月22日	大邱大学校プログラム2015	218,800円
2	台湾・国立中興大学	6	平成27年8月7日～ 8月18日	中興大学プログラム2015	132,698円
3	シンガポール Ngee Ann Polytechnic	9	平成27年9月5日～ 9月20日	Bridge to the Future Program	268,039円
4	カナダ・ ウィルフリッドロリエ大学	6	平成27年8月7日～ 8月24日	LEAF Business English Program	601,080円
5	オーストラリア シドニー工科大学	10	平成28年2月16日～ 3月19日	シドニー工科大学プログラム	1,000,000円
6	シンガポール カーティン大学	15	平成28年2月20日～ 3月19日	カーティン大学プログラム	1,500,000円
7	中国 浙江理工大学	8 (9)	平成28年3月2日～ 4月2日	浙江理工大学プログラム	400,000円
8	韓国 培材大学校	11	平成28年3月2日～ 3月25日	培材大学校プログラム	(550,000円)
9	台湾 国立東華大学	7	平成28年2月19日～ 3月26日	東華大学プログラム	560,000円
10	香港 香港中文大学	4人 (10人) *6名はJASSO受給	平成28年2月20日～ 3月1日	香港中文大学プログラム	200,000円
合計		90人 (107人)			5,430,617円

2.5.2 平成27年度佐賀大学学生海外派遣奨励費

番号	申請者・所属	学年	指導教員	留学予定先	留学期間
1	古賀 大規 文化教育学部	4	早瀬 博範	アメリカ スリッパリーロック大学	10ヵ月
2	十時亜矢佳 文化教育学部	3	早瀬 博範	アメリカ スリッパリーロック大学	10ヵ月
3	平松 千紘 経済学部	3	竹村 敏彦	フィンランド ユバスキュラ大学	10ヵ月
4	茶園 彩 文化教育学部	2	相野 毅	フランス オルレアン大学	12ヵ月
5	服部 菜緒 文化教育学部	2	山崎 功	韓国 国民大学校	10ヵ月
6	古川友里絵 文化教育学部	2	早瀬 博範	アメリカ パシフィック大学	12ヵ月

【帰国学生の成果報告】

1. 古賀 大規 (文化教育学部) スリッパリーロック大学

異文化に飛び込んだからといってある程度の期間が過ぎると、毎日が刺激的で楽しい日々だけではない。日本と同じように楽しいことも辛いことも起きてくる。自分のモチベーションを上げるためにも、何を学びたいのかを明確にし、積極的に外に出て、様々なことを体験してほしいと思う。部屋の中に閉じこもっているようでは同じである。大事にしてほしいことは自分の希望で留学を決意し、家族や友人たちのもとを一年間離れるわけだから自分が留学できる有り難さを両親をはじめ、お世話になった人たちにしっかりと感謝してほしいと思う。家族や友人の近くにいられない現実に時々辛くなることもあったが、留学したからには多くのことを学び、経験して帰国する責任があると思う。

2. 十時亜矢佳（文化教育学部）スリッパリーロック大学

英語だけの授業や勉強は時に大変であったが、たくさんの出会いがあったおかげで友人や教授に勇気づけられることが多かったように思う。次第に自分から積極的に声を掛けることができるようになり、アメリカの違う文化、似ている考え方、振る舞いも実際に体験することができた。留学を志す方の中には語学が大好きでとにかく語学を学びたいという人が多いと思うが、それよりも英語で何を学ぶかということがそれ以上に重要で、あくまでも英語はツールだということを思い知らされた留学生活であったので、英語の勉強はもちろん、自分の興味のある分野、趣味などを難なく英語で伝えらると友達も増えるし、自信にもつながると思う。留学中、自分が成長しているかを気にするより、自分のやりたい事にただひたすらチャレンジすることが大切だと思う。

3. 茶圓 彩（文化教育学部）オルレアン大学

留学中は困難なことや嫌なことなどいろいろな体験をするのでそれを乗り越えて順応していくと、フランス語が通じた時の喜びを感じることができ、主張することの大切さ、自分の考えを持ちながらも相手の価値観を受け入れる大切さを理解でき、たくましくなっていくと思う。またヨーロッパにある国に留学することの良い面の一つに隣国に魅力的な国があり、色々なことを学ぶ機会も英語を使う機会も持つことができることである。留学は決して楽しいことばかりではない。しかしそれを乗り越えた時に感じる喜びは一生の財産になると思う。

2.5.3 平成27年度佐賀大学学生海外研修支援事業（申請13件中13件採択）

番号	学部・学科 所属	プログラム名	申請者	交流大学・機関名 派遣国	研修期間	支援人数 (派遣人数)	派遣額
1	全学教育機構	Cultural Immersion Program at Slippery Rock University in America	早瀬 博範 教授	アメリカ合衆国	11日間	10	500,000円
2	医学部	ハワイ大学臨床推論ワークショップ	福森 則男 助教	アメリカ合衆国	5日間	5	250,000円
3	農学部	ベトナムダナン市における環境保全及び農業技術移転に関する研修	田中 宗浩 教授	ベトナム	6日間	7	350,000円
4	工学系研究科	環アジア国際研修プログラム（グローバル社会における文化多様性と歴史的環境の保全活用にかかわる建築・都市デザインワークショップ）	三島 伸雄 教授	タイ王国	10日間	10 (14)	500,000円
5	文化教育学部	環境保護とキリスト教文化を学ぶ2週間 -ドイツ、スイス、フランス(アルザス)での海外実習-	重竹 芳江 准教授	ドイツ・スイス	15日間	5 (6)	250,000円
6	文化教育学部	第33回ドイツ語とドイツ文化のための研修旅行	重竹 芳江 准教授	ドイツ	29日間	0	0円
7	文化教育学部	ドイツ・ハレ芸術デザイン大学との交流協定を前提とした交流と総理解のための視察・研修	田中 右紀 教授	ドイツ	12日間	6	300,000円
8	文化教育学部	「フランス語とフランス文化」実習	相野 毅 教授	フランス	12日間	0	0円
9	工学系研究科	高電圧・電力機器に関する国際パートナーシップ教育プログラム	村松 和弘 教授	中国	7日間	9	450,000円
10	農学部	ミャンマーの地域開発と国際協力を考えるスタディーツアー 「アジアフィールドワーク」	辻 一成 准教授	ミャンマー	7日間	4	200,000円
11	農学部	インドネシアの農村開発と環境問題を考えるスタディーツアー 「アジアフィールドワーク」	藤村 美穂 准教授	インドネシア	5・6日間	7	350,000円
12	全学教育機構	Cultural Immersion Program at Slippery Rock University in America（春期特別プログラム）	早瀬 博範 教授	アメリカ合衆国	11日間	6	300,000円
13	農学部	スリランカ伝統健康食品に含まれる有効成分の探索研究	渡邊 啓一 教授	スリランカ	25日間	2	100,000円
合計						71 (76)	3,550,000円

【採択プログラムの成果報告】1. 早瀬 博範 教授（全学教育機構）“Cultural Immersion Program at Slippery Rock University in America”

特筆すべき成果として、まず参加学生の装具的な英語力の向上を挙げたい。具体的には、すべての学生がスリッパリーロック到着直後は、特に会話の場面で、適切な語彙や時制の選択、正しい文章構造の生成がうまく出来ていなかった。しかしながら、研修終了時には、完全ではないにしろ、参加学生のスピーキング力は大きく向上しており、セルフモニタリング等のメタ認知が働いていた様子が窺えた。リスニング力についても同様で、もちろんすべての英語が聞き取れるまでには至っていないが、引率教員の間からも大きく向上したことが確認できた。また、この研修では毎日課題としてジャーナルを書き、参加学生からはライティング力が改善したという報告を受けている。アメリカ文化の受容という点に関しても特筆すべき成果として挙げたい。研修開始当初は日米の文化の違いに戸惑っている姿を頻繁に目にしたが、ホームステイや大学での授業体験により徐々にアメリカの生活に順応できていたことが確認できた。

2. 福森 則男 助教（医学部）「ハワイ大学臨床推論ワークショップ」

臨床推論について医学知識と臨床技能を結びつけながら系統的に学習することができ、帰国後も自身の学習方法が明確にできたことである。患者の症状から診断に至るまでにどのような鑑別診断を考えて必要な診察や検査を組み立てていくのかをシナリオに基づいて学習できた。日本と米国の医学教育カリキュラムの違いと医学生のモチベーションの差を比較することができ、今後の学習目標を具体的に設定することができた。特に医学英語能力と英語によるコミュニケーションの必要性は将来国際的に活躍する医師としては必須な能力であり、すべての参加者が今後の継続した学習目標に挙げていた。これらはいずれも今後の学習行動の向上と維持に大きな影響を与えるものと期待できる。

3. 田中 宗浩 教授（農学部）「ベトナムダナン市における環境保全及び農業技術移転に関する研修」

現地訪問したのは海外経験も少ない学部学生であったが、当初は遠慮がちに活動していたものが途中から自分の役割を自律的に判断しながら業務や研修に積極的に取り組む姿勢を示し、短期間で大きな教育成果を得られたものと考えられる。当方らの活動はダナン市関係部局からも高い注目を集めており、滞在中は関係部署が我々の活動の見学を訪れ、現地課題の情報収集と解決に向けた議論を積み重ねることができた。これにより JICA 事業の現地への認知と普及に大きく貢献したと考えられる。

4. 三島 伸雄 教授（工学系研究科）「環アジア国際研修プログラム（グローバル社会における文化多様性と歴史的環境の保全活用にかかわる建築・都市デザインワークショップ）」

デザインワークショップはチェンマイ旧都心の外側にある商業地を対象として、建築・都市デザインの課題に対する提案作業に取り組んだ。参加した5大学で3グループを構成し、英語でディスカッション・発表を行った。またチェンマイ郊外へのエクスカージョンも行うことができ、タイの自然・歴史・文化など理解することができた。参加学生にアジアの文化多様性と歴史的環境の保全活用に対するグローバルな感覚を持たせることができ、学生たちも非常に満足したようであった。

5. 重竹 芳江 准教授（文化教育学部）「環境保護とキリスト教文化を学ぶ2週間」

今回の海外実習はドイツ語を使うことが大きな目的であったが、ホームステイ地が多言語国家のスイスであったことと、宗教画のために国境を越えてフランスの街に出かけたりしたことで、ドイツ語だけでなく英語、フランス語を自由に操る人たちに感銘を受けていた。コミュニケーションのための外国語という感覚を身をもって体験したようで、今後の人生にも役に立つのではないかと期待している。

7. 田中 右紀 教授（文化教育学部）「ドイツ・ハレ芸術デザイン大学との交流協定を前提とした交流と総合理解のための視察・研修」

特筆すべきは以下の通りである。1. コンセプトを発展させるカリキュラムの実践等、ハレ大学の優れた授業内容に触れ、佐賀大学で取り入れることができる。2. 今後の留学に向け、語学力の上達や作品の制作意図の明確化など、個々の課題が明確となった。3. 卒業制作・修論に向け、情報収集をすることができた。4. 今後の進路決定の参考になった。5. 海外で生活できる自信につながった。

9. 村松 和弘 教授（工学系研究科）「高電圧・電力機器に関する国際パートナーシップ教育プログラム」

今回は日本学生支援機構（JASSO）「海外留学支援制度（協定派遣）」の支援も受けたため、参加学生9人で期間も9日間と充実したプログラムとなった。またJASSOの支援を受けた学生5人はTOEIC400点以上を取得する必要があったため、参加学生9人のうち6人が400点以上を有し、講義や研究発表に対して質問が積極的に行われるとともに武漢大学生との交流活動も活発に行われた。TOEIC400点以上の条件のため、高電圧・電力機器に関する研究を行っている学生のみでなく、分野を関連する「磁界解析」、「制御」まで拡大して参加者を決定しなければならず、これら学生の「高電圧・電力機器」への理解を危惧したが、学生の研修報告書にもあるように、地球規模の環境負担低減に関する技術に興味を持ったようで、学生の研究テーマより語学力や積極性が重要であることが分かった。

10. 辻 一成 准教授（農学部）「ミャンマーの地域開発と国際協力を考えるスタディーツアー アジアフィールドワーク」

以下の点が特筆すべき成果である。1. ビルマ語能力のない学生が、ポオー族・インダー族等の少数民族と積極的にコミュニケーションしたこと。2. 通常の観光では体験できない少数民族の居中地域の村へのホームビジット等を通して、直接的に民衆の暮らしに接し、途上国の現実をリアルに体験できたこと。3. 日本のNGO活動への直接な参加によって、国際開発協力への関心が高まったことである。

11. 藤村 美穂 准教授（農学部）「インドネシアの農村開発と環境問題を考えるスタディーツアー アジアフィールドワーク」

ジュアンダ大学の積極的なサポートにより、学生と教員の交換会が盛大に開催され、互いの国や大学の課題や特徴について理解することができた。日本に関心がある学生が多く、多くの意見交換がなされ学生たちも活発に質疑応答に参加することができた。今回の交流日程の中に、イード・ムバラク（イスラム教の供儀祭）が含まれており、それに伴う家畜（牛やヤギ）の売買の現場をいたるところで観察でき、宗教と家畜市場の関係を現場で実感することができたこと、大学と地域社会との結びつき（貧困者への供儀肉の提供）の現場を見ることできたことは予期しなかった効果である。

12. 早瀬 博範 教授（教育学部）“Cultural Immersion Program at Slippery Rock University in America”

事前に設定した「長期留学への明確なイメージを持たせる」という点に関しては概ね達成できた。スリッパリーロック大学で自分の専攻に関する授業に参加することで、アメリカの大学で授業を受けるためになすべきことを具体的にイメージできたのではないと思われる。また「アメリカ生活や文化に対する理解を深める」という点に関しては、テロの懸念からフィールドワークの実施場所をニューヨークではなく、カナダのトロントに変更した。しかしながら現地的一般家庭で生活することにより日米の文化の相違点・類似点を学ぶことができたと思われる。最後に「長期留学に必要な高度のアカデミックな英語表記能力を習得させる」という点に関して、研修開始直後と終了時の参加学生の英語力、特にスピーキングについては全ての学生が飛躍的に向上している。

13. 渡邊 啓一 教授（農学部）「スリランカ伝統植物に含まれる有効成分の探索研究」

スリランカの伝統医療であるアーユルヴェーダで使用されている植物について、株式会社アルビオンとともに聞き取り調査及び訪問大学での情報交換を行い、健康食品や化粧品への応用の可能性について協議を実施した。更にアルビオンが所有するスリランカ伝統植物研究所にて植物の栽培方法や抽出方法の検討を行った。着目していたアーユルヴェーダに多用されるブラック・シードの種子の入手が大変困難であったが、現地の人々との積極的な交流による情報収集が功を成して種子の入手に成功した。また JICA、JETRO を訪問し、本プログラムによる将来的なスリランカ産業の活性化について協議した。このように佐賀大学—ペラデニア大学—企業（アルビオン）の3者間の研究・人的交流が図られ、これまでにない産学官及び国際間連携がもたらされたと確信できる。

3. キャンパスの国際化

グローバル化が急速に進む社会において、異文化に対して関心をもち、寛容性や協働できる資質や能力を養うことは高等教育における重要な課題の一つとして捉えられている。とりわけ留学の機会を得ない学生たちが、キャンパスの中でそのようなスキルや適性を養うことができる国際教育カリキュラムの策定と方法論の検討、実践の蓄積が必要である。しかし実態としては、大学教育のカリキュラムの一部としてこのような機会を得られている学生はわずかである。そこで国際交流推進センターでは、平成25年より異文化への理解と高いコミュニケーションスキルを備えた学生を「佐賀大学グローバルリーダーズ」として採用し、国際交流推進センター・国際課とリーダーズ学生とが協働し外国人留学生および海外留学支援の取り組みを行なっている。常時10人程度のメンバーは日本人学生以外に留学生も半数含まれており、多文化グループでキャンパスの国際化や日本人学生と留学生との交流を促進するための方法をディスカッションし、様々な活動を展開している。これらの学生には留学生チューターと同じように謝金が支払われている。

学生の間では国際交流は特別なもの、あるいは語学能力のある特別な学生が参加するものであるという認識が根強くある。関心がない、または関心があってもハードルが高いものであると感じて消極的になっている学生が多いという現状がある。留学生もメンバーとなっているグローバルリーダーズが互いの違いをプラスの力に変えて生き生きと学内で活動を行う姿を可視化することで、異文化交流が特別なものではなく常にそこにあるものとして学生に認識してもらうことができると期待している。

グローバルリーダーズの活動の主軸は、「ランゲージラウンジ」という平日の昼食時間帯に留学生と日本人学生が外国語で会話を楽しむ取り組みである。今年度は英語、中国語、韓国語、日本語、世界文化（留学生の出身国・文化紹介）を日替わりで2学期間実施した。今年度は、交換留学や短期研修に参加する予定の学生や、外国語に興味のある学生など、単に会話を楽しむだけでなく、学ぶ（役に立つ）という要素を重視した日本人学生の参加が多かった。ランゲージラウンジの活動以外には、今年度、留学生と日本人学生との交流を促進するスポーツ交流会、カルチュラルナイト、留学生のウェルカムパーティ、フェアウェルパーティの開催、新入留学生の日本社会・学生生活への適応をうながす新入留学生研修旅行での支援、オープンキャンパスでの高校生向けランゲージラウンジの実施などを多数行なった。これらに加え、今年度はキャンパスの多文化共生を実現するための取り組みの一つとして、食事制限のある学生が佐賀市内で食事をする際のガイドとなるマップを作成し、新入留学生に配布した。



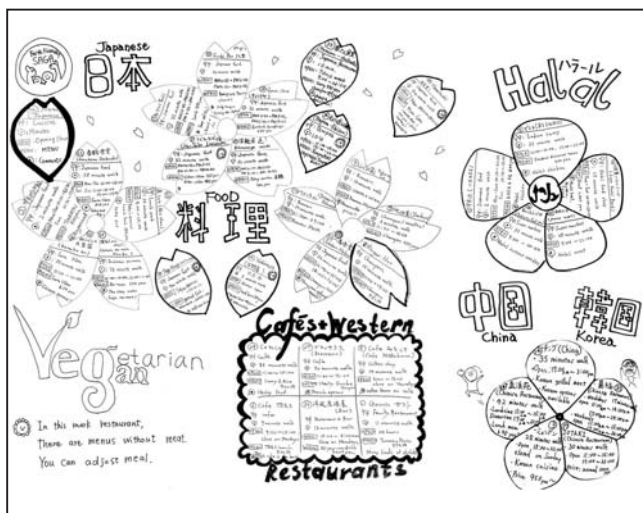
ランゲージラウンジ



スポーツ交流会



カルチュラルナイトにてインドネシアの伝統楽器の紹介と演奏



グローバルリーダーズ作成のレストランマップ

Ⅲ. 学術研究交流部門

国際交流推進センターにおける「研究者海外派遣の支援」は個人を対象とした派遣ではあるが、その先に大学の学術研究交流へ発展することを期待する事業と言える。研究の世界はネットワークの拡大によりグローバル化が進み、地方大学の研究環境は昔に比べると改善されたかもしれない。多少の不便さに目をつぶれば、海外との研究打ち合わせもインターネット経由で簡単に行うことができる。しかしながら多くの場合、最先端の情報、技術や革新的な方法などは、何気ない対面の議論から出発するとともに、実験分野では一緒に作業をしてみないとわからないことも多々ある。この支援事業をきっかけに実績を積み、外部資金の獲得、さらに大きな枠組みでの研究体制の構築につなげることで、佐賀大学の学術研究を発展させることが期待される。新しい研究を始めたい若手の方の積極的な応募があることを願っている。

1. 国際研究集会開催支援事業

平成27年度佐賀大学国際研究集会開催支援事業（申請6件中5件採択）

	氏名 所属	開催地	研究集会名	開催期間	参加者数	支援金額
1	ラタナーヤカ・ピヤダーサ 教授 経済学部	佐賀大学	「25周年記念 東アジア経済シンポジウム」 人的資源育成と経済発展～アジアの経験～	平成27年10月23日 ～10月26日	145人	1,000,000円
2	三島 伸雄 教授 工学系研究科	佐賀県有田町	環アジア国際セミナー [日・韓・タイ・カザフ] – グローバル社会における文化多様性と歴史的環境の保全活用	平成27年7月29日 ～8月3日	93人	1,000,000円
3	大渡 啓介 教授 工学系研究科	佐賀大学	3rd International Symposium on Host Compounds for Separation and Functionality in Saga	平成27年7月29日 ～8月4日	73人	797,500円
4	荒木 宏之 教授 低平地沿岸海域研究センター	佐賀大学	世界の低平地技術に関する国際研究集会	平成27年7月29日 ～7月30日	20人	734,000円
5	白武 義治 教授 農学部	佐賀大学	2015年東アジア農協に関する国際フォーラム	平成27年10月19日 ～10月21日	200人	454,000円
					合計	3,985,500円

【採択プログラムの成果報告】

1. ラタナーヤカ・ピヤダーサ 教授（経済学部）「25周年記念 東アジア経済シンポジウム」－人的資源育成と経済発展～アジアの経験～

以下の7点が今回の国際研究集会により得られた成果である。①海外協定大学の教員との共同研究について関心が高まったこと、②今日の世界経済、特にアジア経済の発展のために極めて必要性が高い課題について英語・日本語で発表・議論する機会になったこと、③経済学部設立50周年ホームカミングデーの際、海外OB/OGの研究者全員を参加させ、経済学部がこれまでどのようにして国際的な人的資源育成に貢献してきたのかについて、多くの方々に広く知ってもらう機会を提供できたこと、④地域市民の方々に海外の多様な文化を理解してもらう機会を与えたこと、⑤協定校との教育研究関係を強化できたこと、⑥佐賀県の魅力を海外の研究者に紹介する機会になったこと、⑦過去25年間に及ぶ経済学部が海外協定・友好大学・研究機関と共同で実施してきた国際共同研究成果を著書として出版できるようになったことである。

2. 三島 伸雄 教授（工学系研究科）「環アジア国際セミナー [日・韓・タイ・カザフ] –グローバル社会における文化多様性と歴史的環境の保全活用」

今年度の特筆すべき点は以下の3点である。①来年度から芸術地域デザイン学部に移動する有馬隆文教授にも協力してもらって実施し、学部間連携の礎ができた点、②チェンマイ大学にも参加してもらうことができ、国際

コンソーシアム形式が多大学形式に進化してきた点、③学内でのスタート・エンドを行ったことにより、学内外の会場を用いた国際研究集会の実施方法が明確になって、今後の進め方の試金石になった点である。

3. 大渡 啓介 教授（工学系研究科）” 3rd International Symposium on Host Compounds for Separation and Functionality in Saga”

前々回の第1回大会では11件の特別講演、15のポスター発表がなされた。前回第2回大会もドイツ、オーストラリア、韓国から優秀な研究者を招聘し、11件の特別講演、16のポスター発表がなされたこのような講演会を開催できた。参加者は47人であった。今回は2回の大会と比較すると、招待講演5件、1件の一般講演、18件のポスター発表と小規模会議ではあったが、希少金属の分離回収剤の開発に特化し、また一般講演はレアメタルの国際動向について最新動向を講演していただき有意義であった。英語による講演会参加も教育的意義が高いが、その後のポスター発表も教育的意義が高いと思われる。すでに留学を希望している4年生が数人おり、3月の訪独でもドレスデン工科大学のGraduate Academyに国際交流の学生支援について説明を受けており、本シンポジウムはそのような学生への支援の一助となると判断している。

4. 荒木 宏之 教授（低平地沿岸海域研究センター）「世界の低平地技術に関する国際研究集会」

期間中は低平地沿岸海域研究センターならびに都市工学科の教員も含めて今後の研究、教育プログラム、交流活動について情報交換、議論を行うことができた。その結果、ASIAN レクチャーの継続的開催の他、日本人学生の短期受け入れやさくらサイエンスプラン世界展開力強化事業などの交流活動への参加・協力が研究者間で確認された。海外の協力大学へエフォート分散が期待されるため、本学の国際化に大きく貢献できると考えられる。

5. 白武 義治 教授（農学部）「2015年東アジア農協に関する国際フォーラム」

このたび、東アジア農協に関する国際フォーラムが佐賀大学で開催された。この実績を踏まえ、国際農業農村共同組合学会が創立され、本部事務局を佐賀大学・白武研究室に置くこととなった。これは、先代の伊東勇夫教授が日本共同組合学会の創設にかかわり、初代会長として第1回学会を本校で開催された学術的伝統を継承する意味でも特記すべきものである。日本、中国、台湾、韓国の研究者を中心に、この国際フォーラムを進めてきたが、その会員は広く東南アジアやアフリカ諸国、ドイツ、イギリス、ロシア等まで波及する契機となった。農業・農協を巡る国際的経済環境が大きく変化する中、農業・農協の担い手教育、地域の経済・農業の研究支店からも重要な意義があった。

2. 研究者海外派遣支援事業

平成27年度佐賀大学研究者海外派遣事業（申請7件中4件採択）

	氏名・所属	国名	海外派遣機関名	派遣機関	支援金額
1	寺本 憲功 教授 医学部	イギリス	オックスフォード大学 糖尿病・内分泌・代謝センター	平成27年12月11日～22日 および 平成28年2月12日～22日	900,000円
2	上村 哲司 准教授 医学部	アメリカ合衆国	ベイラー医科大学 血管外科	平成27年7月15日～ 8月5日	457,000円
3	古賀 弘毅 准教授 全学教育機構	アメリカ合衆国	シカゴ大学	平成27年7月5日～ 8月2日	646,000円
4	高橋 智 准教授 工学系研究科	フランス オランダ	Universite Paris Diderot-Paris 7, APC Institute for Theoretical Physics and Spinoza Institute, Utrecht University	平成27年10月25日～ 11月8日	539,000円
					2,542,000円

【採択プログラムの成果報告】

1. 寺本 憲功 教授（医学部）「スライス標本を用いた膵ランゲルハンス島β細胞の機能的関連の解明～新たなインスリン分泌制御機序の解明～

脳スライスパッチ法の技術を応用し、単離した膵ランゲルハンス島を用い、1個の膵β細胞から微弱な電気信号を記録することができる in situ patch 法は OCDEM およびスウェーデンの1カ所の研究所以外では実施されていないが、本派遣において研究代表者は in situ patch 法を習得し、帰国後、本学部において直ちに同じスペックの実験装置を立ち上げ、同法による基礎研究実験を開始した。このことは本派遣事業による大きな成果と考えられる。また OCDEM にて実際に共同実験を行い、実験指導下さった Zhang 博士を本年度（平成29年3月）、長崎にて開催予定の第90回日本薬理学会年会へ研究代表者が主宰する学術シンポジウムへシンポジストとして招待講演を依頼し、すでに快諾を得ている。またその折、本学部へも来訪願ひ、共同実験および学術講演をして頂く計画である。

2. 上村 哲司 准教授（医学部）「Da Vinci Surgical System（ダ・ヴィンチ外科手術システム）を用いた欠陥吻合手技教育システムの開発」

派遣の前からオンライントレーニングや佐賀大学内でのトレーニングが有効であることを感じた。ダヴィンチは術者の手と鉗子の動きの縮小倍率を調整することができるスケーリング機能や術者の手の震えを除去できる手ブレ防止機能を備えており、繊細な手術操作が可能である。その点は、形成外科におけるマイクロサージャリーに新たな医療用ロボット：ダ・ヴィンチ外科手術システムを用いる意義が大きいと感じている。この経験から医療用ロボット：ダ・ヴィンチを用いた欠陥吻合手技教育システムの開発を行うことができることが最も大きな成果である。今回の事業を計画する中で、ベイラー医科大学 血管外科および MD Anderson Cancer Center 形成外科との密接な関係が構築された。科研費等の外部資金獲得申請において、海外の研究室ラボとのコネクションは大切であり、次の共同研究の見通しができたと感じている。

3. 古賀 弘毅 准教授 (全学教育機構)「佐賀西部方言の現在形の音声的代償延長の分析」

Inkelas 氏 (形態・音韻論の最先端の研究者の一人) の講義の課題に申請者の研究をまとめ提出し、有意味なコメントとアドバイスを得ることができた。Baković 氏 (音韻論の最先端の研究者の一人) とともに申請者は現在の研究を提示・相談し、修正した論文を送付しコメントを得ることを約束できた。2人は現在の申請者の研究の参照先ともなる業績のある研究者で、このネットワークの形成は有意義であった。さらに、計算音韻論は、申請者の現在の研究のさらなる進展の方向性を与えてくれるものであった。また、担当の Heinz 氏とも申請者は現在の研究を提示し議論ができた。以後も研究の計算音韻論からの進展もコメントを得る約束ができた。

4. 高橋 智 准教授 (工学系研究科)「密度揺らぎの起源とインフレーション宇宙の解明へ向けた理論的研究」

今回の派遣事業の中で、重力と非最小結合をもつスカラー場の理論における複数場インフレーションモデルに関する研究について、特に宇宙の密度揺らぎの生成と、宇宙背景放射等の宇宙観測でのモデルの検証に関して詳細な議論を行った。上記のようなモデルについて、現在の観測から示唆される初期密度揺らぎのスケール依存性を実現するような密度揺らぎを生成しつつ、他の現在の観測の制限にも矛盾しないモデル構築が可能かについて検討した。特に、ある種の非最小結合を考えた場合に、非常に興味深いモデルを構築できる可能性について議論し、この議論から今後の共同研究が発展すると考えられる。これは、今回の特筆すべき成果である。

IV. 地域国際連携室

1. 「平成27年度産学官国際交流セミナー」の開催

8月6日、佐賀大学において、佐賀地域留学生等交流推進協議会主催・佐賀県及び佐賀県産業人材確保プロジェクト推進会議の共催（佐賀県商工会議所連合会及び公益法人佐賀県国際交流協会の後援）による「産学官国際交流セミナー」が開催され、佐賀県内企業や留学生など約80人が参加した。本セミナーは、佐賀県内の企業と留学生等の間で、佐賀地域の国際化の方向性及び留学生の日本企業への就職について理解を深めることを目的として、平成23年度から毎年開催されているものである。今年も海外進出や海外への販路拡大を目指す企業などが、佐賀で学ぶ留学生の取り込みや国際的な活躍が期待される日本人学生へ企業紹介などを実施した。

セミナーは2部構成となっており、第1部の全体セミナーでは、会長の佛淵孝夫佐賀大学学長及び佐賀県の村山仁志国際・観光部副部長の挨拶の後、文部科学省高等教育局学生・留学生課留学生交流室の山口啓一専門官、国際協力機構（JICA）九州市民参加協力課の田中宏幸課長、本学経済学部の山本長次教授からグローバル人材の活用促進等に関する講演があった。また、本学経済学部出身の中国からの元留学生から日本での就職体験が報告された。第2部として、会場を移して県内企業と留学生等との交流会が行われ、留学生と県内企業の担当者が、直接交流する機会を持った。

【日 時】平成27年8月6日（木）13：00～16：15

【場 所】佐賀大学 教養教育1号館111教室および同学生ホール

【プログラム】

第1部

主催者挨拶

佐賀地域留学生等交流推進協議会 会長（佐賀大学長）

佐賀県 国際・観光部 副部長

講演

文部科学省高等教育局 学生・留学生課留学生交流室 専門官

国際協力機構（JICA）九州 市民参加協力課 課長

佐賀大学経済学部 教授

本多機工株式会社 代表取締役社長

佐賀県国際・観光部観光戦略グループ観光戦略推進監

留学生の就職体験・活動紹介

九州旅客鉄道株式会社 徐 芳美

（平成26年 佐賀大学経済学部卒・中国出身）

第2部

企業・学生交流会



全体セミナー

項目	交流Ⅰ	交流Ⅱ	交流Ⅲ
授業科目／プログラム	SPACE-J・日研生のための科目「日本事情研修D」	香港中文大学サマープログラム	留学生を対象とした日本語科目（「文法Ⅰ」「読解Ⅱ」）
授業担当者	布尾・中山	吉川	古賀・中山
場 所	武雄高校	武雄高校	佐賀大学
実 施 日	平成27年6月20日（土）	平成27年7月7日（火）	平成27年1月20日（水）
参加留学生	28人	10人	文法Ⅰ 6人 読解Ⅱ 8人
内 容	スポーツをテーマとして日本事情について学ぶ授業の一環として訪問した。 内容：①ゲーム・自己紹介 ②高校生による武雄の紹介 ③部活動見学 ④武雄市内見学	香港中文大学からの短期受け入れの留学生が参加。 内容：①留学生による香港紹介 ②英語授業参加 ③武雄市内見学	高校生と留学生が小さなグループになって交流した。高校生による武雄市についての発表や質疑応答や、自己紹介（英語および日本語で）、交流のためのゲームなどを行った。



交流Ⅰ：高校生との交流



交流Ⅲ：高校生とのグループワーク

4. 地域国際交流行事等への協力

○鹿島ガタリンピックへの留学生参加

鹿島ガタリンピック実行委員会による当行事およびホームステイへの参加依頼に対し、本学留学生の募集および行事参加への協力を行ったものである。参加者はガタリンピック開催前日に鹿島町を訪れ、町内の家庭にホームステイさせていただいた。留学生にとって、日本の家庭生活、文化を知る貴重な機会であった。翌日は「鹿島ガタリンピック」の各種競技に参加し、地域の社会と文化に触れ、参加者や町の方々と交流した。なお、開催に先立ち、佐賀大学にて実行委員会の関係者による参加者事前説明会も行われた。鹿島ガタリンピックとは日本一干満の差が大きい（6M）広大な有明海の干潟を利用した干潟の上で行う運動会である。昭和60年5月3日に第1回鹿島ガタリンピックが開催され、今では県内外から多くの方に愛され続けているイベントとなっている。

- 【日 時】** 平成27年5月30日（土）～31日（日）
【主 催】 第31回鹿島ガタリンピック実行委員会
【参加者】 留学生30人
【内 容】
 鹿島市内でのホームステイ 5月30日（土）
 「鹿島ガタリンピック」への参加 5月31日（日）



人間むつごろう（潟スキー）の様子

○TOMODACHI プロジェクトによる海外学生の佐賀大学訪問

認定NPO法人地球市民の会の協力依頼を受け、アジア・パートナーシップ・プロジェクト「TOMODACHI 100」で来日した中国及び韓国からの大学生等43人に対して、佐賀大学全般の紹介・文化教育学部の中村隆敏教授から「佐賀大学の映像デザイン教育」、全学教育機構の五十嵐勉教授から「中国と韓国との比較から考える日本の農と食」と題するミニ授業が行われた。また、帰国前日に佐賀県青年会館で開催された発表会においては、センターの新美達也准教授がコメンテーターとして参加した。

- 【日 時】** 平成28年1月29日（金）及び2月2日（火）
【共 催】 認定NPO法人地球市民の会・佐賀大学国際交流推進センター
【対象者】 プログラムに参加する中国および韓国からの大学生等43人
【協力行事】

- 佐賀大学オープンカレッジ 1月29日（金）
 発表会（佐賀県青年会館） 2月2日（火）



プログラム参加学生とカッチーくん

5. 佐賀県との連携

佐賀県が平成26年6月に策定した新佐賀国際戦略「世界とともに発展する佐賀県行動計画～羅針盤～」に基づき、佐賀県・佐賀市が共同で市民及び県内在住外国人・留学生を対象に大規模なアンケート調査を10月から実施した。そこで、県内・市内の大部分の外国人留学生が所属する本学が協力し、本学留学生に対して、11月30日から12月8日の間でアンケートを配布・回収した。

また、事前に本調査の受託機関である東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター及び佐賀県・佐賀市との間で、数回の打合せと、全体の調査票回収後の平成28年3月11日には本調査の最終報告書作成にあたり、合同で意見交換会を実施し、参加した。

昨今、多様な国・地域からの留学生が増加するなか、佐賀県・佐賀市の担当者等とも綿密に連携をとり、定期的な会合を通じて、本学と地域の国際化に向けた取組を着実に実施している。

資料1：学長・理事表敬訪問及び学術交流

○平成27年4月21日 学長表敬

来訪者：ペラデニア大学(スリランカ) Prof. Shantha Hennyake 副学長
Dr. Nanda Gunawardena (国際研究センター長) ほか3人

概要：学術交流に関する意見交換のため



○平成27年8月3日 理事表敬

来訪者：韓国交通大学(韓国)・タマサート大学(タイ)、チェンマイ大学(タイ)
Dr. Kang Hyukjun (韓国交通大学 助教)、
Dr. Denpaiboon Chaweewan (タマサート大学准教授)
Dr. Shummadtayar Umpiga (チェンマイ大学 講師) ほか3人

概要：環アジア国際セミナー実施の発展、日韓タイの協力拡大についての協議のため

○平成27年8月21日 理事表敬

来訪者：ジュアンダ大学(インドネシア) Dr. Siti Irma Rahmawati (Director of International Affairs) ほか2人

概要：学術交流に関する意見交換のため



○平成27年9月8日 理事表敬

来訪者：デザインアカデミーアイントホーフエン(オランダ)
Olaf Stevens氏(講師、陶磁器・ガラスのアーティスト)

概要：学術・学生交流に関する意見交換のため



○平成27年9月14日 理事表敬

来訪者：ハレ芸術デザイン大学(ドイツ)Dieter Hofmann 学長

概要：学術・学生交流に関する意見交換のため



○平成27年10月13日 学長表敬

来訪者：スリジャヤワルダナプラ大学(スリランカ)
Prof. Sampath Amararatunge 学長

概要：学術・学生交流に関する意見交換のため



○平成27年10月22日 理事表敬

来訪者：カセサート大学(タイ)、ムハマディアパレパレ大学(インドネシア)、
ハサヌディン大学(インドネシア)、ペラ
デニア大学(スリランカ)、ルアクラ農業
研究センター

Prof. Chollada Luangpituksa (カセサート
大学経済学部准教授)

Dr. Syarifuddin Yusuf (ムラマディアパレ
パレ大学長) ほか11人

概要：経済学部主催の東アジア経済シンポジウム
開催のため



○平成27年11月4日 理事表敬

来訪者：スリウィジャヤ大学(インドネシア)

Ms. Badia Perizade Radjamin 学長ほか6人

概要：学術・学生交流に関する意見交換のため



○平成27年11月11日 学長表敬

来訪者：メージョ大学（タイ）Asst. Prof. Dr. Cham-nian Yosraj 学長ほか6人

概要：学術・学生交流に関する意見交換のため



○平成27年11月25日 理事表敬

来訪者：セバラスマレット大学（インドネシア）
Agung Tri Wijayanta, Ph.D. 工学系研究
科機械工学科准教授

概要：学生交流に関する意見交換のため



○平成27年12月14日 理事表敬

来訪者：国立東華大学（台湾）Prof. Chih Peng Chu
国際交流処長

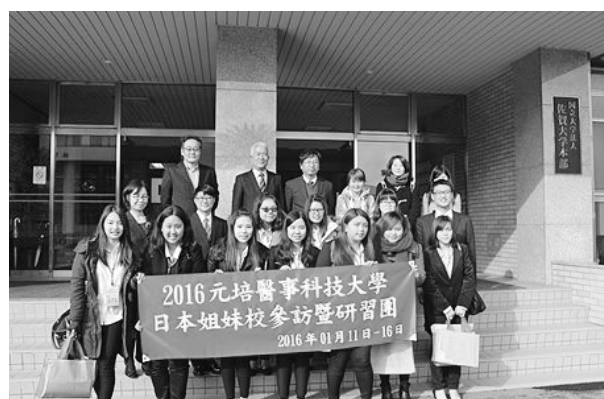
概要：短期プログラム・交換留学プログラムに関する意見交換のため



○平成28年1月12日 理事表敬

来訪者：元培医事科技大学（台湾）HSU, Wei Chen
国際交流協力センター副センター長ほか教
職員2人、学生9人 計12人

概要：国際交流に関する意見交換のため



○平成28年 3月22日 理事表敬

来訪者：アンザン省（ベトナム）レ・バン・ヌン副
知事他 8人

概 要：アンザン省との学术交流等の促進並びに意
見交換のため



○平成28年 3月29日 理事表敬

来訪者：ダルマプルサダ大学（インドネシア）Dr.
Mochammad Sholichin 学術・国際担当副
学長

概 要：学术交流等の促進並びに意見交換のため



資料2：国際交流推進センター事業関連の海外出張・訪問

期間	行先(国)	訪問先	用件	出張者名
平成27年5月26日 ～5月30日	台湾	輔仁カトリック大学	国際会議出席	山田 直子 准教授
平成27年7月20日 ～7月22日	韓国	東重大学校	環黄海学長フォーラム準備会議	大和 武彦 副センター長 内村 太一 国際課長
平成27年9月13日 ～9月21日	インドネシア	ガジャマダ大学	佐賀大学ホームカミングデー in インドネシア 佐賀大学フェア・日本留学フェア	山田 直子 准教授
平成27年9月14日 ～9月18日	インドネシア	ガジャマダ大学	佐賀大学ホームカミングデー in インドネシア 佐賀大学フェア	大和 武彦 副センター長 内村 太一 国際課長 木下翔太郎 事務員
平成27年9月27日 ～10月2日	ベトナム	ダナン大学	第3回日越学長会議2015に出席のため	大和 武彦 副センター長 内村 太一 国際課長
平成27年11月3日 ～11月5日	韓国・釜山	ロッテホテル釜山	148回環黄海経済・技術交流会議(釜山会合)のため	大和 武彦 副センター長 内村 太一 国際課長 出雲 大輔 事務員 坂本 輝 事務員
平成27年11月5日 ～11月8日	ベトナム・ハノイ	ベトナム国家大学 ハノイ外国語大学 他	ベトナム国家大学ハノイ外国語大学創立60周年式典出席 他	ラタナーヤカ・ピヤダーサ 教授
平成27年11月17日 ～11月24日	アメリカ ニューヨーク	日本国大使館・ 総領事館 他	カケハシプロジェクトNY研修引率	山田 直子 准教授 寺坂 直子 事務補佐員
平成27年12月12日 ～12月16日	タイ・バンコク	バンコクコンベンション センター	平成27年度日本留学フェア	新美 達也 准教授 山田佳奈美 コーディネーター
平成28年1月24日 ～1月27日	インドネシア	インドネシア教育省 他	インドネシア教育省の政府奨学金担当者との意見交換・協議他	大和 武彦 副センター長 山田 直子 准教授
平成28年2月3日 ～2月7日	タイ・バンコク	在タイ日本国大使館 他	佐賀大学ホームカミングデー 他	大和 武彦 副センター長 新美 達也 准教授 内村 太一 国際課長 山田佳奈美 コーディネーター
平成27年2月19日 ～2月24日	台湾	国立東華大学	派遣初年度の東華大学プログラムの教育内容と方法、受け入れ体勢、生活環境	山田 直子 准教授
平成27年2月21日 ～3月1日	中国	香港中文大学 他	2016年春 佐賀大学・香港中文大学交流プログラム引率	吉川 達 講師
平成28年2月28日 ～3月6日	オーストラリア	シドニー工科大学・ コンベンションセンター	APEIE 太平洋国際教育協会での情報収集、海外協定校担当者との意見交換	山田 直子 准教授
平成28年3月18日 ～3月28日	スウェーデン フィンランド	マルメ大学 ヘルシンキ大学 他	訪問大学での関係者聞き取り、スウェーデン人学生半構造化面接調査	山田 直子 准教授
平成28年3月30日 ～3月31日	中国・上海	上海大学、 浙江理工大学 他	SUSAP 見学・担当者との懇談会、学内視察、表敬、佐賀県人会との懇談会 他	新美 達也 准教授

資料3：平成27年度 留学生数

(平成27年5月1日現在)

学部等 Faculties	学部 Undergraduates					大学院 Graduate Schools			
	文化教育学部 Faculty of Culture and Education	経済学部 Economics	医学部 Medicine	理工学部 Science and Engineering	農学部 Agriculture	修士課程（博士前期） Master's Course			
						教育学研究科 Education	経済学研究科 Economics	医学系研究科 Medicine	工学系研究科 Graduate School of Science and Engineering
国名 Countries									
ネパール連邦民主共和国 Federal Democratic Republic of Nepal									1
バングラデシュ人民共和国 People's Republic of Bangladesh						1			1
スリランカ民主社会主義共和国 Democratic Socialist Republic of Sri Lanka							1		
タイ王国 Kingdom of Thailand							2		1
マレーシア Malaysia		1		18					
インドネシア共和国 Republic of Indonesia									
大韓民国 Republic of Korea		1		3					
インド共和国 Republic of India									
ベトナム社会主義共和国 Socialist Republic of Viet Nam	7					4			
中華人民共和国 People's Republic of China	4	17		8	1	7	5		6
カンボジア王国 Kingdom of Cambodia						1			
台湾 Taiwan			1						
ケニア共和国 Republic of Kenya									
エジプト・アラブ共和国 Arab Republic of Egypt									
アメリカ合衆国 United States of America									
フランス共和国 French Republic									
オーストラリア Commonwealth of Australia									
パキスタン・イスラム共和国 Islamic Republic of Pakistan									
モザンビーク共和国 Republic of Mozambique									
ミャンマー連邦共和国 Republic of the Union of Myammer									
フィンランド共和国 Republic of Finland									
ポーランド共和国 Republic of Poland									
リトアニア共和国 Republic of Lithuania									
計 Total	11	19	1	29	1	13	8	0	9

国名 Countries	大学院 Graduate Schools						鹿児島大学 大学院 農学系研究科 United Graduate School of Agricultural Kagoshima University	研究生 科目等履修生 特別聴講学生 Research・ Part-Time Students・ Special Audits	日本語・ 日本文化 研修生 Japanese Studies Students	合計 Total	
	学部等 Faculties	修士課程 (博士前期) Master's Course	博士課程 Doctoral Course	博士後期 Doctoral Course	環境・エネルギー科学グローバル 教育プログラム 博士前期 Master's Course	PPGA 博士後期 Doctoral Course					特別コース 博士後期 PSJP Doctoral Course
	農学研究科 Agriculture	医学系研究科 Medicine	工学系研究科 Graduate School of Science and Engineering	工学系研究科 Graduate School of Science and Engineering	工学系研究科 Graduate School of Science and Engineering	工学系研究科 Graduate School of Science and Engineering					
ネパール連邦民主共和国 Federal Democratic Republic of Nepal			1							2	
バングラデシュ人民共和国 People's Republic of Bangladesh	2		5	1	2	1	3	2		18	
スリランカ民主社会主義共和国 Democratic Socialist Republic of Sri Lanka			1					3		5	
タイ王国 Kingdom of Thailand				2	4	1		2		12	
マレーシア Malaysia			1							20	
インドネシア共和国 Republic of Indonesia			1				2	2		5	
大韓民国 Republic of Korea			1					4		9	
インド共和国 Republic of India									1	1	
ベトナム社会主義共和国 Socialist Republic of Viet Nam	1		2					2	1	17	
中華人民共和国 People's Republic of China	2	3	14			1		25		93	
カンボジア王国 Kingdom of Cambodia										1	
台湾 Taiwan								10		11	
ケニア共和国 Republic of Kenya				1						1	
エジプト・アラブ共和国 Arab Republic of Egypt		1					1			2	
アメリカ合衆国 United States of America								1		1	
フランス共和国 French Republic								1		1	
オーストラリア Commonwealth of Australia								3		3	
パキスタン・イスラム共和国 Islamic Republic of Pakistan			1							1	
モザンビーク共和国 Republic of Mozambique				1						1	
ミャンマー連邦共和国 Republic of the Union of Myammer				1						1	
フィンランド共和国 Republic of Finland								2		2	
ポーランド共和国 Republic of Poland								1		1	
リトアニア共和国 Republic of Lithuania								1		1	
計 Total	5	4	27	6	6	5	4	59	2	209	

資料4：大学間学術協定校一覧

(平成28年3月現在)

No.	国名	大学名	国公私等
1	大韓民国	全南大学校	国立
2		安東大学校	国立
3		国民大学校	私立
4		釜山大学校	国立
5		木浦大学校	国立
6		釜慶大学校	国立
7		済州大学校	国立
8		韓国技術教育大学	国立
9		光州女子大学校	私立
10		培材大学校	私立
11		牧園大学校	私立
12		大邱大学校	私立
13	中華人民共和国	華東師範大学	国立
14		北京工業大学	国立
15		首都師範大学	国立
16		中国農業大学	国立
17		遼寧師範大学	国立
18		ハルビン工業大学	国立
19		華東理工大学	国立
20		浙江理工大学	国立
21		西南政法大学	国立
22		浙江科技大学	国立
23		遼寧大学	公立
24	台湾	輔仁カトリック大学	私立
25		国立政治大学	国立
26		国立中興大学	国立
27		国立台北大学	国立
28		国立東華大学	国立
29		元培科技大学	私立
30		国立連合大学	国立
31		文藻外語大学	私立
32	ベトナム	ベトナム国家農業大学	国立
33		ノンラム大学	国立
34		ハノイ国家大学外国語大学	国立
35		ビン大学	国立
36		ベトナム国家大学ハノイ校自然科学大学	国立
37		ベトナム国家大学ハノイ校工科大学	国立
38		アンザン大学	国立
39	カンボジア	プノンベン王立法経大学	国立
40		王立農業大学	国立
41		王立プノンベン大学	国立

42	ラオス人民民主共和国	ラオス国立大学	国立
43	タイ王国	カセサート大学	国立
44		コンケン大学	国立
45		チェンマイ大学	国立
46		アジア工科大学	国立
47		モンクット王ラカバン工科大学	国立
48		タマサート大学	国立
49		インドネシア共和国	ハサヌデイン大学
50	ガジャマダ大学		国立
51	サム ラツランギ大学		国立
52	リアウ イスラム大学		私立
53	スリビジャヤ大学		国立
54	ダルマプルサダ大学		私立
55	セベラスマレット大学		国立
56	ジュアンダ大学		私立
57	マラン国立大学		国立
58	ボゴール農業大学		国立
59	ジャカルタ国立大学		国立
60	ブラウイジャヤ大学		国立
61	バングラデシュ人民共和国	バングラデシュ工科大学	国立
62		ラジャヒ大学	国立
63		バングラデシュ農科大学	国立
64		ジャハンギールナガール大学	国立
65		チッタゴン工科大学	国立
66		ダッカ工科大学	国立
67	スリランカ民主社会主義共和国	ペラデニア大学	国立
68	パキスタン・イスラム共和国	コハート科学技術大学	国立
69		ベシャワール大学	国立
70	英国	グラスゴー大学	国立
71	ルーマニア	アレクサンドルイオンクザ大学	国立
72	フランス共和国	ブルゴーニュ大学	国立
73		オルレアン大学	国立
74	ポーランド共和国	ルブリン工科大学	国立
75	リトアニア共和国	ヴィタウタスナグヌス大学	国立
76	アメリカ合衆国	アンダーソン大学	私立
77		カリフォルニア大学デイビス校	州立
78		バシフィック大学	私立
79		スリッパリーロック大学	州立
80	カナダ	マニトバ大学	国立
81		ウィルフリッド・ロリエ大学	国立
82	オーストラリア連邦	ラトロープ大学	国立
83		シドニー工科大学	国立
84	フィンランド共和国	ユバスキュラ大学	国立

計 20ヶ国・地域 84大学

資料5：平成27年度 国際交流推進センター関連行事

H27	佐賀大学生の派遣・教育・支援	留学生に対する教育・支援	国際交流推進事業
4月	20日 海外留学・国際交流ウィーク(～24日まで)	3日 新入留学生オリエンテーション 日本語コース プレースメントテスト 7日 日本語コース オリエンテーション SPACE オリエンテーション 8日 2015年度 SPACE 入学式 12日 ウェルカムピクニック 18日 新入留学生研修旅行(～19日 嬉野市) 25日 SPACE-E フィールドワーク(福岡市、大宰府市)	7日 第1回 国際交流推進センター運営委員会 14日 第2回 国際交流推進センター運営委員会(メール会議) 27日 第3回 国際交流推進センター運営委員会
5月		20日 留学生健康診断(～21日まで) 22日 新入留学生歓迎会 30日 鹿島ガタリンピック&ホームステイ(31日まで)	25日 第4回 国際交流推進センター運営委員会
6月	30日 佐賀大学サマープログラム(～7月14日まで)	5日 消防訓練(国際交流会館) 20日 SPACE-J・日研生フィールドワーク(武雄市) 27日 SPACE-E フィールドワーク(鳥栖市朝倉市)	25日 第5回 国際交流推進センター運営委員会
7月	5日 香港中文大学サマープログラム(～14日)	19日 地引網例会参加(佐賀西ライオンズクラブ主催)	29日 第6回 国際交流推進センター運営委員会
8月	7日 中興大学(台湾)研修派遣(～19日まで) 大邱大学校(韓国)研修派遣(～22日まで) Leafプログラム(カナダ)(～24日まで) 10日 台北大学(台湾)研修派遣(～21日まで)	2日 栄の国まつり参加(栄の国まつり振興会主催) 7日 SPACE、日本語・日本文化研修プログラム終了式	6日 佐賀地域外国人留学生等交流推進協議会総会・産学官国際交流セミナー
9月		28日 日本語コース プレースメントテスト 30日 日本語コース オリエンテーション SPACE プログラム オリエンテーション 日本語・日本文化研究生オリエンテーション 新入留学生オリエンテーション	2日 第7回 国際交流推進センター運営委員会(メール会議) 14日 海外版ホームカミングデー(～18日 インドネシアジョグジャカルタ) 24日 第8回 国際交流推進センター運営委員会2015年度学位記授与式(9月期) 28日 第3回 日越学長会議(～29日まで ベトナム・ダナン)
10月	28日 SUSAP2015 成果報告会	7日 SPACE・日本語・日本文化研究生入学式 22日 留学生健康診断 24日 新入留学生研修旅行(～25日 唐津市)	21日 佐賀地域外国人留学生援助会理事会 26日 第9回 国際交流推進センター運営委員会
11月	4日 平成26年度交換留学成果報告会 11日 トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム報告会・説明会 17日 対日理解促進交流プログラム ケカハシプロジェクト(アメリカ ～24日) 25日 平成26年度アジアで活躍できるリーダー養成プログラム成果報告会	14日 SPACE-E フィールドワーク(熊本市) 28日 SPACE-J・日研生フィールドワーク(有田市)	3日 環黄海産学官連携大学学長フォーラム(5日まで) 6日 全国国立大学法人留学生センター長及び留学生課長等合同会議 13日 日本語・日本文化研修留学生問題に関する検討会議 20日 第10回 国際交流推進センター運営委員会
12月			5日 第11回 国際交流推進センター運営委員会(メール会議) 25日 第8回 国際交流推進センター運営委員会
H28 1月	20日 佐賀大学基金奨学金受給決定通知書授与式	22日 留学生のための就職支援講演会	8日 第12回 国際交流推進センター運営委員会(メール会議) 22日 国際交流推進センター主催 国際交流セミナー 29日 第13回 国際交流推進センター運営委員会
2月	16日 シドニー工科大学(オーストラリア)研修派遣(～3月27日まで) 21日 香港中文大学研修派遣(～3月1日まで) 20日 カーティン大学(シンガポール)研修派遣(～3月19日まで)	18日 SPACE、日本語・日本文化研修プログラム修了式	6日 佐賀大学海外版ホームカミングデー in バンコク 15日 第14回 国際交流推進センター運営委員会
3月	2日 培材大学(韓国)研修派遣(～25日まで) 浙江理工大学(中国)研修派遣(～4月2日まで)		11日 第15回 国際交流推進センター運営委員会(メール会議) 29日 第16回 国際交流推進センター運営委員会

資料6：国際交流推進センター規則

(平成23年9月28日制定)

(趣旨)

第1条 この規則は、国立大学法人佐賀大学基本規則（平成16年4月1日制定）第11条の7第2項の規定に基づき、国立大学法人佐賀大学国際交流推進センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

(目的)

第2条 センターは、国立大学法人佐賀大学（以下「本学」という。）の部局及び地域社会と連携し一体となって、海外の教育研究機関との国際交流の進展に寄与することを目的とする。

(室及び部門並びに業務)

第3条 センターに、前条に掲げる目的を達成するため、国際交流企画推進室及び地域国際連携室並びに学生交流部門及び学術研究交流部門を置く。

2 国際交流企画推進室は、次に掲げる業務を行う。

- (1) 国際戦略構想に基づく国際交流事業の企画推進に関すること。
- (2) 本学が海外に置くサテライトの整備、活用の施策・立案・実施に関すること。
- (3) 重点交流大学の選定に関すること。
- (4) 海外教育研究機関等との学術交流の協定及び学生交流の協定締結に関すること。
- (5) 国際交流の危機管理体制の整備に関すること。
- (6) 国際交流機関との連携に関すること。
- (7) 国際広報に関すること。
- (8) 卒業又は修了した留学生のネットワークの構築に関すること。
- (9) 海外教育研究機関等の情報収集及びコーディネート業務に関すること。
- (10) その他国際交流に関すること。

3 地域国際連携室は、次に掲げる業務を行う。

- (1) 地域社会及び産業界との国際交流推進のための連携・協力に関すること。
- (2) 佐賀県、市町村、産業界、各種団体等と連携した国際交流事業の企画・立案・実施に関すること。
- (3) 地域連携の国際ワークショップ等の企画・立案・実施に関すること。
- (4) 地域社会、産業界、各種団体と連携した留学生の奨学基金事業の実施に関すること。
- (5) 留学生の企業等のインターンシップ受入先の開拓に関すること。
- (6) 留学生の就職活動支援に関すること。
- (7) 地域社会と連携した留学生の支援に関すること。
- (8) 佐賀地域留学生等交流推進協議会の運営に関すること。
- (9) 留学生、地域社会、産業界及び各種団体とのコーディネート業務に関すること。
- (10) 地域への広報に関すること。
- (11) その他地域国際連携に関すること。

4 学生交流部門は、次に掲げる業務を行う。

- (1) 留学生受入れプログラムの開発支援に関すること。

- (2) 奨学金、宿舎等の留学生受入環境及び学生派遣環境の整備に関すること。
- (3) 重点交流大学とのジョイントプログラムの企画推進に関すること。
- (4) 国際教育プログラムの実施支援に関すること。
- (5) 海外教育研究機関等との学生交流の協定締結支援に関すること。
- (6) 留学生の生活指導及び相談に関すること。
- (7) 学生の派遣先の情報収集及び開拓に関すること。
- (8) 留学生の渡日時及び渡日後の在留手続支援業務に関すること。
- (9) 留学生の受入業務及び学生の派遣業務に関すること。
- (10) 派遣学生の査証取得等の在留手続支援業務に関すること。
- (11) 外国人留学生宿舎の管理運営に関すること。
- (12) その他学生交流に関すること。

5 学術研究交流部門は、次に掲げる業務を行う。

- (1) 海外教育研究機関等との共同研究の促進に関すること。
- (2) 海外教育研究機関等との学術交流協定の締結支援に関すること。
- (3) 研究成果等の国際社会への情報発信に関すること。
- (4) 国際シンポジウム、国際セミナー等の企画・立案・実施に関すること。
- (5) 国際研究ネットワークの整備に関すること。
- (6) 研究者の渡日時及び渡日後の在留手続支援業務に関すること。
- (7) 研究者の受入業務及び派遣業務に関すること。
- (8) 派遣研究者の査証取得等の在留手続支援業務に関すること。
- (9) 外国人研究者宿舎の管理運営に関すること。
- (10) その他学術研究交流に関すること。

(鍋島サテライト)

第4条 センターに、鍋島地区における国際交流業務を遂行するため、鍋島サテライトを置く。

2 鍋島サテライトの業務に関し、必要な事項は、別に定める。

(職員)

第5条 センターに、次の職員を置く。

- (1) センター長
- (2) 副センター長
- (3) 鍋島サテライト長
- (4) 室長及び部門長
- (5) 専任の教員
- (6) 併任の教員
- (7) 契約コーディネーター
- (8) その他必要な職員

(センター長)

第6条 センター長は、理事のうち学長が指名した者をもって充てる。

2 センター長は、本学の国際交流事業を統括する。

- 3 センター長の任期は、当該理事の任期とし、再任を妨げない。

(副センター長)

第7条 副センター長は、本学の専任の教授のうちからセンター長が指名した者をもって充てる。

- 2 副センター長は、センター長を補佐し、センターの業務を掌理する。
- 3 副センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 4 副センター長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(鍋島サテライト長)

第8条 鍋島サテライト長は、本学の専任の教授のうちからセンター長が指名した者をもって充てる。

- 2 鍋島サテライト長は、センター長及び副センター長を補佐し、鍋島サテライトの業務を掌理する。
- 3 鍋島サテライト長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 4 鍋島サテライト長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(室長及び部門長)

第9条 室長及び部門長は、センターの専任の教員又は併任の教員のうちから、センター長が指名した者をもって充てる。

- 2 室長及び部門長は、室及び部門の業務を掌理する。
- 3 室長及び部門長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 4 室長及び部門長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(国際コーディネーター)

第10条 センターに、国際コーディネーターを置き、センターの専任の教員及び契約コーディネーターをもって充てる。

- 2 国際コーディネーターは、センター長及び副センター長を補佐し、センターの業務を横断的かつ包括的に処理する。

(専任の教員及び契約コーディネーターの選考)

第11条 専任の教員及び契約コーディネーターの選考は、第14条に定める運営委員会の議を経て、学長が行う。

(併任の教員)

第12条 併任の教員は、センター長及び部局長の推薦に基づき、運営委員会の議を経て、学長が任命する。

- 2 併任の教員は、室及び部門に配置し、国際コーディネーターと協働して、室及び部門の業務を処理する。
- 3 併任の教員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(国際マネージャー)

第13条 センターに、国際マネージャーを置き、学術研究協力部国際課長をもって充てる。

- 2 国際マネージャーは、国際コーディネーター並びに室及び部門との調整を図る。

(運営委員会)

第14条 センターに、国立大学法人佐賀大学国際交流推進センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）

を置く。

2 運営委員会は、次に掲げる事項を審議する。

- (1) センターの管理運営の基本方針に関する事項
- (2) センターの人事に関する事項
- (3) 本学の国際化に係る具体的施策の策定及び実施に関する事項
- (4) センターの予算及び決算に関する事項
- (5) 室及び部門での企画・立案に関する事項
- (6) その他センターの管理運営に関する重要事項

(組織)

第15条 運営委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター長
 - (2) 副センター長
 - (3) 鍋島サテライト長
 - (4) 室長及び部門長
 - (5) 専任の教員（国際コーディネーター）
 - (6) 各学部（理工学部を除く。）から選出された教員 各1人
 - (7) 工学系研究科から選出された教員 1人
 - (8) 全学教育機構から選出された教員 1人
 - (9) 教養教育運営機構から選出された教員 1人
 - (10) 留学生センターから選出された教員 若干人
 - (11) 契約コーディネーター（国際コーディネーター）
 - (12) 学術研究協力部国際課長（国際マネージャー）
- 2 前項第6号から第10号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 3 第1項第6号から第10号に掲げる委員に欠員が生じた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(議長)

第16条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

- 2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。
- 3 委員長に事故があるときは、副センター長がその職務を代行する。

(議事)

第17条 運営委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

- 2 運営委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。ただし、教員の人事に関する事項及び特に重要な事項については、出席した委員の3分の2以上の賛成を必要とする。

(専門委員会)

第18条 運営委員会に、専門的事項を審議するために、必要に応じて、専門委員会を置くことができる。

(意見の聴取)

第19条 運営委員会は、必要に応じて、委員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。

(事務)

第20条 センター及び運営委員会の事務は、学術研究協力部国際課が行う。

(雑則)

第21条 この規則に定めるもののほか、センターに関し、必要な事項については、運営委員会の議を経て、センター長が定める。

附 則

- 1 この規則は、平成23年10月1日から施行する。
- 2 国立大学法人佐賀大学国際貢献推進室設置規則（平成16年5月18日制定）は、廃止する。
- 3 この規則施行後、最初に任命される第7条の副センター長及び第8条の鍋島サテライト長並びに第9条の室長及び部門長の任期は、第7条第3項、第8条第3項及び第9条第3項の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。
- 4 この規則施行後、最初に任命される第12条の併任の教員の任期は、同条第3項の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。
- 5 この規則施行後、最初に任命される第15条第1項第6号から第10号までの委員の任期は、同条第2項の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。

国際交流推進センター長	滝澤 登	理事
国際交流推進副センター長	大和 武彦	教授
国際コーディネーター	山田 直子	准教授
国際コーディネーター	新美 達也	准教授
国際コーディネーター	山田佳奈美	

国際交流推進センター運営委員会委員

小田 康友	教授・鍋島サテライト長
ラタナーヤカ・ピヤダーサ	教授・国際交流企画推進室長
大和 武彦	教授・地域国際連携室長
山田 直子	准教授・学生交流部門長
杉山 晃	教授・学術研究交流部門長
名本 達也	教授（文化教育学部）
野方 大輔	准教授（経済学部）
熊本 栄一	教授（医学部）
松尾 繁	教授（工学系研究科）
辻 一成	准教授（農学部）
早瀬 博範	教授（全学教育機構）
布尾勝一郎	准教授（全学教育機構）
中山亜紀子	准教授（全学教育機構）
新美 達也	准教授（国際コーディネーター）
内村 太一	（国際課長・国際マネージャー）
山田佳奈美	（国際コーディネーター）

国際交流企画推進室

ラタナーヤカ・ピヤダーサ 教授・室長（経済学部）
 大和 武彦 副センター長（国際交流推進センター）
 山田 直子 教授（国際交流推進センター）
 新美 達也 准教授（国際交流推進センター）
 早瀬 博範 教授（文化教育学部）
 後藤 正英 准教授（文化教育学部）
 高野 吾朗 准教授（医学部）
 萩原 世也 教授（工学系研究科）
 辻 一成 准教授（農学部）
 古賀 弘毅 准教授（全学教育機構）

学術研究交流部門

杉山 晃 教授・部門長（工学系研究科）
 大和 武彦 教授（国際交流推進センター）
 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）
 新美 達也 准教授（国際交流推進センター）
 早川智津子 教授（経済学部）
 熊本 栄一 教授（医学部）
 大渡 啓介 教授（工学系研究科）
 野間 誠司 准教授（工学系研究科）

学生交流部門

山田 直子 准教授・部門長（国際交流推進センター）
 大和 武彦 教授（副センター長）
 新美 達也 准教授（国際交流推進センター）
 重竹 芳江 准教授（文化教育学部）
 早川智津子 教授（経済学部）
 福森 則男 助教（医学部）
 松尾 繁 教授（工学系研究科）
 上野 大介 准教授（農学部）
 丹羽 順子 准教授（全学教育機構）
 中山亜紀子 准教授（全学教育機構）
 江口 誠 准教授（全学教育機構）

地域国際連携室

大和 武彦 教授・室長（副センター長）
 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）
 新美 達也 准教授（国際交流推進センター）
 名本 達也 教授（文化教育学部）
 戸田純一郎 教授（経済学部）
 柴 錦春 教授（工学系研究科）
 山中 賢一 准教授（農学部）
 布尾勝一郎 准教授（全学教育機構）
 吉川 達 講師（全学教育機構）

鍋島サテライト

小田 康友 教授・サテライト長
 熊本 栄一 教授
 高野 吾朗 准教授
 福森 則男 助教

学術研究協力部 国際課

課長 内村 太一
 副課長 木寺 仙明
 係長 江崎 弘幸
 事務員 出雲 大輔
 事務員 木下翔太郎
 事務員 坂本 輝
 事務補佐員 野口 尊子
 事務補佐員 寺坂 直子
 事務補佐員 一ノ瀬明子
 国際アソシエイト 張舒

大学情報

佐賀大学国際交流推進センター

Center for promotion of International Exchange Saga University

840-8502 佐賀県佐賀市本庄町1 佐賀大学 国際交流推進センター

電話：0952-28-8203

Fax：0952-28-8819

<http://www.irdc.saga-u.ac.jp>